

インド洋大津波災害復興支援「学校再建プロジェクト」

2006年9月度 夏期スリランカ訪問報告書

(2006.8.28～9.3)

インド洋大津波災害復興支援「学校再建プロジェクト」学生実行委員会

2006年9月支援校訪問報告書 目次

はじめに	-1-
目次	-2-
1. 団体紹介	-4-
2. 訪問までの流れ	-5-
3. 訪問の概要	
(1)訪問の目的	-7-
(2)訪問メンバー	-7-
(3)全体タイムスケジュール	-8-
(4)ドキュメント	-9-
4. Ice Breaking Project(Day 1)	
(1)企画書	-12-
(2)実施にあたって	-14-
5. Regional Rediscovery Project(Day 2)	
(1)企画書	-16-
(2)実施にあたって	-18-
6. Kids Activity Project(Day 3)	
(1)企画書	-21-
(2)実施にあたって	-23-
7. Clean Education Project	
(1)企画書	-24-
(2)実施にあたって	-26-
8. Research Project	
(1)企画書	-28-

(2)実施にあたって	-29-
9. 準備段階で起きた問題点とその対応	-37-
10. 訪問メンバーへの質問	-39-
11. 訪問メンバーによる感想文	
久保裕一	-42-
置村悠一郎	-44-
笹下加代	-46-
橋本 雪	-48-
小島 武	-50-
間中 光	-52-
可知健太郎	-53-
田村将人	-54-
植田雄紀	-56-
服部和希	-57-
秋本翔太	-59-
岩淵宏美	-61-
柳生由布子	-63-
中木寛敏	-66-
12. 現地同行者のコメント	
スリランカNPO法人『荷車の会』代表 坂田繁和氏	-68-
13. 感謝の言葉	-71-

1 . 団体紹介

2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震・インド洋大津波を受け、立命館学園は被災地域への学校再建支援を表明しました。この学校再建支援において、学生レベルで出来ることはないかと有志が集まり設立されたのが、私たち立命館インド洋大津波災害復興支援事業「学校再建プロジェクト」学生実行委員会です。これまでの活動としては、講演会の開催、学園祭での展示、学内外から鉛筆を集め、それらを被災地に送る活動である「えんぴつ運動」等の実施、また2006年の2月には被災地であるスリランカを訪問し、防災教育やマンゴーの植樹等を行いました。

このような活動を通じて考えた、本事業における私たちの役割は、被災地に対する心の支援です。すなわち、私たちは学校校舎等の建物を建設することはできませんが、一人ひとりの想いを形にし、被災地に暮らす子どもたちを笑顔にすることなら出来るかもしれません。

最後に、私たちの活動は、被災地の子どもたちや、彼らの住む地域の「きっかけ」づくりです。そのため、活動の成果は早急に見えるものではないため、目標や到達点を具体的に設定できるものではありません。また、心の支援というものは長期的かつ継続的なものである必要があります。そのため、私たちはこの活動を絶やすことなく、多くの経験から学び、より良いものになるようこれからも努力してゆきたいと思います。

2 . 訪問までの流れ

まずはじめに、訪問地の選定について述べたい。この度の訪問地は、立命館学園が講堂・校庭の整備支援する学校のあるアルガムベイ地区ではなく、スリランカ南部にあるマータラ地区となった。その背景には、現在スリランカで起こっている民族対立がある。大学側より、危険地域に近いアルガムベイ地区を訪問することは難しいため、比較的安全とされている南部マータラ地区の小学校を訪問するという代替案を受けた。このマータラ地区にある小学校は、NGO「荷車の会」代表坂田氏の紹介によるもので、坂田氏が校長先生より直接要請を受けたものである。しかし、学生実行委員会としては、学園の事業と一体化して行うことや、継続的な支援が重要であると考えていたため、今夏の被災地での活動は見送るか、もしくはマータラ地区にある小学校で活動をするかという議論になった。そのような中、支援校以外の学校を訪問することについて否定的な意見も出される一方、1回生をはじめとするメンバーの多くが被災地を訪問したことがなかったため、実際に被災地を訪れることで「新たな方向性を考えることができるのではないか」「現状を見ることは重要」という意見も多く出された。そして、最終的に今回はアルガムベイ地区を訪問することはできないが、先ず何より実際に訪問し体感することが重要という考えに至り、マータラ地区を訪問することに決定した。

次に、訪問メンバーについて述べたい。この度の訪問が、前回2月度と大きく異なる点は、1)新メンバーが増え、1回生から3回生までの各学年の学生が参加したこと、2)衣笠キャンパスに在籍する学生だけでなく、BKC(琵琶湖草津キャンパス)に在籍する学生も参加したこと、3)他団体であるATE、TISAからの参加者を迎えたこと、4)APU立命館アジア太平洋大学「愛の波」との合同実施ではなく、立命館大学「学生実行委員会」が単体で実施したことが挙げられる。3)に関してであるが、ATEは環境や生態系を研究している団体である。今夏にスリランカでの調査活動を予定していたが、スリランカ情勢の悪化により実施の是非が検討されていた。そこで、本事業の責任者である藤山一郎先生がATEの顧問をしていたことにより、学生実行委員会とATEが共に活動してはどうかという提案がなされた。5月頃に藤山先生、学生実行委員会委員長久保、ATE代表可知の3人で協議したところ、ATEが学生実行委員会として渡航するという条件に、共に活動を実施することになった。一方TISAは、立命館大学に在籍する留学生をサポートする団体である。学生実行委員長久保が衣笠TISAの代表を兼務してしたことから、3月頃にTISAメンバーに参加を呼びかけたところ、2名が参加することとなった。また、4)に関してであるが、今回APU「愛の波」との共同実施が実現しなかった理由として、「愛の波」がスリランカ訪問の前提としていた活動場所がアルガムベイ地区であったということと、京都と大分という距離感のため足並みを揃えることが難しく、それぞれの活動に対する目的や想いを共有することができなかったためである。従って、今回は立命館大学学生実行委員会のみでの実施、及び計14名の学生で渡航することとなった。

最後に、企画準備について述べたい。夏の訪問に向けて、4月頃より準備を進めてきた。しかし、新規メンバーの加入、また他団体からの参加によりメンバーも増え、実際に現地

スリランカを訪れたことのないメンバーが多くいたため、初めの頃はスリランカの文化や教育制度についての勉強会を中心に行った。その後、夏季スリランカ訪問の企画内容を具体的に協議するため、前回 2 月度実施の反省を踏まえ「交流」「教育」「調査」という三項目に分類して行った。それぞれの項目において、これまでや他団体での経験をもとに、各項目のリーダーを決め、彼らを中心に企画内容を練っていった。しかし、このような動きは 4～5 月の頃のことである。というのは、その頃大学よりアルガムベイ地区は訪問を見合わせるべきとの判断が下り、学生実行委員会内でどのような判断をするか議論されていたためである。この議論に時間を要したため、企画内容を具体化させるのは 7 月頃からとなった。そのため、準備に余裕があまりなかったこともあり、全ての企画を全員で取り組むことにした。準備する中で大変だったことは、訪問地であるマータラ地区に誰も訪れたことがなかったことである。そこで、坂田氏の意見を参考にしながら、企画内容を詰めていった。

以上が、今夏の現地での活動における訪問までの流れである。

3 . 訪問の概要

(1) 訪問の目的

- (1) 子どもたちが、前向きな一歩を踏み出せるように支援すること。
- (2) 子どもたちが、自分たちの住む地域の良さについて改めて発見するとともに、より広い世界にも目を向けられるようにすること。
- (3) スリランカの環境社会に配慮した復興や発展に寄与すること。
- (4) 学生実行委員会メンバーが、スリランカでの活動を通して学び、考え、そして今後とも活動を継続・さらに発展させることができるようにすること。

(2) 訪問メンバー

Students

氏名		学部 回生	役職
久保 裕一	Hirokazu Kubo	産業社会学部 3 回生	統括責任者
置村 悠一郎	Yuichiro Okimura	政策科学部 3 回生	
小島 武	Takeshi Kojima	国際関係学部 3 回生	
笹下 加代	Kayo Sasaka	国際関係学部 3 回生	Ice Breaking Project 企画責任者
橋本 雪	Yuki Hashimoto	文学部 3 回生	Kids Activity Project 企画責任者
間中 光	Hikaru Kenchu	産業社会学部 2 回生	Clean Education Project 企画責任者
可知 健太郎	Kentaro Kachi	政策科学部 2 回生	Regional Rediscovery Project 企画責任者
田村 将人	Masato Tamura	政策科学部 2 回生	Research Project 企画責任者
服部 和希	Kazuki Hattori	政策科学部 2 回生	会計
植田 雄紀	Yuuki Ueda	経済学部 2 回生	
秋本 翔太	Shyota Akimoto	政策科学部 1 回生	
岩渕 宏美	Hiromi Iwabuchi	文学部 1 回生	
柳生 由布子	Yuuko Yagyu	産業社会学部 1 回生	
中木 寛敏	Hirotooshi Nakagi	経済学部 1 回生	

Managers

氏名		国籍	役職
藤山 一郎 先生	Mr. Ichiro Fujiyama (Team Leader)	Japan	国際機構講師 インド洋大津波災害復興支援事業責任者
坂田 繁数 さん	Mr.Sigekazu Sakata	Japan	国際機構講師 インド洋大津波災害復興支援事業責任者
ラタナさん	Mr. Pallage Don Ratanasiri	Sri Lankan	スリランカ NPO 法人「荷車の会」 現地代表

(3) 全体タイムスケジュール

日時	スケジュール	食事	宿泊先
1 8月28日 (月)	関空 07:30 集合 4階(国際線出発)C アイランド前 関空 10:05 発 香港 13:05 着 (CX503) 香港 14:10 発 コロンボ 20:05 着 (CX735)	機内 機内	【Negombo】 Hotel Topaz 031-5313333
2 8月29日 (火)	ニゴンボ 9:20 発 マータラ 15:00 着 15:30~ 事前打ち合わせ (学校教員・ルフナ大学ボランティアと)	ホテル ローカル ホテル	【Matara】 Polhena Reef Gardens 041-2222478
3 8月30日 (水)	【Day 1】 午前: Ice Breaking Project Clean Education Project 午後: Research Project (Day1)	ホテル ホテル ホテル	
4 8月31日 (木)	【Day 2】 午前: Regional Rediscovery Project 午後: ルフナ大学訪問	ホテル ホテル ホテル	
5 9月1日 (金)	【Day 3】 午前: Kids Activity Project 午後: Research Project (Day3)	ホテル ホテル ホテル	
6 9月2日 (土)	【Day 4】 終日: ウダワラウェイ国立公園調査	ホテル ローカル ホテル	【Ratnapura】 Ratnapura Ratnaloka Hotel 045-2222455
7 9月3日 (日)	ラプナプラ 08:00 発 ニゴンボ 18:00 着 途中、ゾウの孤児院見学・昼食	ホテル ローカル ローカル	【機内泊】
8 9月4日 (月)	コロンボ 02:15 発 香港 12:10 着 (CX700) 香港 13:10 発 関空 19:40 着 (CX564)	機内 機内	

(4) ドキュメント Matara での3日間

8月29日 ニゴンボ マータラ

0750 朝食

盛りだくさんのフルーツと、おいしい紅茶で大満足。

0925 Matara へ出発 By bus

1530 小学校での事前打ち合わせ

先生方やルフナ大学の学生とご対面。

先生方がバナナとケーキ、紅茶をふるまって下さった。

1750 ホテルへ移動 By bus with ルフナ学生

太鼓に合わせてみんなで歌を歌った ホーレー

1800 作業

1900 夕食を兼ねたルフナ学生との交流会

歌えや踊れや、やんややんや

坂田さん持ち込み企画！ジャンボピンゴ大会で大盛り上がり

2230 全体ミーティング&作業

初日の活動への緊張のせいか、会議は深夜まで続いた。

8月30日 DAY1 ~期待に胸をふくらませ~

0700 朝食

バイキング形式で、とり放題

目の前でコックさんがオムレツ or 目玉焼きを

一人ひとりに作ってくれた！

0800 小学校到着

ドッキドキドン どんな子たちかなあ

0805 お迎えの儀式

両国の国旗を持った子供たちが笑顔でお出迎え

現地ならではの出会いの儀式をしてくれた

企画 “Ice Breaking Project”

子供たちの人懐っこい笑顔に思わずほころぶ私たち。

企画 “Clean Education Project”

掃除のご褒美シールが大好評！！リーダーの前に長蛇の列

1150 ホテルへ帰る

1300 昼食

小学校での初活動は大成功



ホッとしたせいか、カレーがカレーが進む君
1410 ヒアリング調査
現地の方々や観光客に、観光に関する質問をした。
1640 フリータイム
海で泳いでもよし。ビーチバレーをしてもよし。
めいめい好きなことをしてスリランカを満喫した。
1910 今日の感想&夕食
それぞれ好きなカレーを選んで食べた。
2000 全体ミーティング&作業
明日の企画へ向けてしっかり準備。



8月31日 DAY2 ~たくさんの笑顔に囲まれて~

0700 朝食
今日は屋外での活動！！
暑さに負けないように、モリモッリ食べた
0815 小学校到着
私たちを見つけて嬉しそうな子ども達！
企画“Regional Rediscovery”
子どもたちはマータラの町の魅力を懸命に伝えてくれた。“この町が好き！”という彼らの気持ちをひしひしと感じた。
企画“Clean Education Project”
もう掃除はお手の物！みんなせっせと大活躍！！



1140 ホテルへ帰る
1230 フリータイム
数名の学生はルフナ大学を訪問した
1930 夕食（一部作業・打ち合わせ）
2200 全体ミーティング&作業
明日はいよいよ最終日！ミーティングにも熱が入る！！



9月1日 DAY3 ~またいつか~

0700 朝食
フルーツジュースが果実たっぷりおいしい！
0815 小学校到着
いつもと変わらぬ子どもたちの笑顔に



“今日で最後”という切ない気持ちは
一気に吹き飛んだ。

企画“Kids Project”

子どもたちはすごく楽しそうにお箸・折り紙・筆ペンを
体験してくれた みんな、お箸を使うのが上手!!!

企画“Clean Education Project”

掃除の大切さ、わかってもらえたかな？

ポスター作り（スリランカ紹介）

一人ひとり違った“スリランカ”or“マータラ”を
描いてくれた 彼らの画才に感動!!

ビデオレター作成

立命館小学校のみんなに日本語でメッセージを収録！

みんなと一緒に「こんにちは」

お別れの儀式

子どもたちによる現地ならではのダンスや歌の披露...

...本当にお別れなんだと実感し、

熱いものがこみ上げてきた。

1215 ホテルへ帰る

静まり返ったバスの中、

それぞれが様々な想いにふけていた。

1315 昼食

気持ちを切り替えて...

午後の調査に向け、しっかりカレーを補給！

1430 ヒアリング調査

一日目で得たそれぞれのノウハウを活かし、

実りのある調査となった。(照)

1900 お疲れさまパーティー（夕食会）

現地のダンスグループの魔よけの踊りを鑑賞！

ルフナの学生が私たち一人ひとりに

ルフナTシャツとBookMarkをプレゼントしてくれた。

2200 記念撮影！ See you in near future.....|

帰りたくない...それでも陽はまた昇る....

いつかきっと、また会いにくるから。



4 . Ice Breaking Project(Day 1)

(1)企画書

企画概要

実施日時 08/30 Wed. 08:35~11:05
実施場所 Kotuwa Janadhipathi Vidyalaya School 教室
対象 Grade6 (30名~45名程度)
企画責任者 笹下加代 (立命館大学国際関係学部 3回生)

スタッフ

司会進行 笹下
プレゼント贈呈 橋本・柳生
名札くじ引き 中木・可知・橋本

資機材

うちわ 約60個
えんぴつ 約1500本
名札 45個(緑・黄・青 各15個)
パソコン(ビデオレター)2台
世界地図 1枚
輪投げの輪 15個
ループ・ザ・ループの輪 3個(新聞3部 = 現地で作成)
パズルゲームのパズル 3セット

8:00 学校到着・準備開始

Ice Breaking Project

8:35 ~ 8:45 挨拶・自己紹介 <10分>

8:45 ~ 9:15 プレゼントとビデオメッセージ <30分>

9:15 ~ 9:35 名札づくり <20分>

9:35 ~ 11:05 企画 <1時間30分>

- ・ 輪投げ
- ・ ループ・ザ・ループ
- ・ パズルゲーム

10分間休憩後、Clean Education Projectへ

Clean Education Project

11:15 ~ 11:55 レクチャー <40分>

- ・ はじめに
- ・ 「掃除の時間」の説明
- ・ 掃除する良さを考える
- ・ 掃除クイズ
- ・ 最後に

11:55 ~ 12:25 掃除の時間 <30分>

- ・ 学校 1班 = 教室
- ・ 2班 = 廊下
- ・ 3班 = 建物外

掃除終了後、教室へ再集合（終礼）

(2)実施にあたって

変更点

- ・開始時間が変更された。
- ・グループ分けを変更。(予定では名札をくじにして班分けする予定だったが、教室についた時点で、子どもたちが3つのグループに分かれていたのでそのまま続行。)
- ・台本(しゃべる内容)に関してはあまり変更なし。流れに支障がない程度の変更のみ。

授業の様子

- ・みんな楽しそうだった。
- ・ルフナの学生がどうしていいのかわからなさそうだった。(はじめに子どもたちに紹介するなどの手を打たなかったことがひとつの要因。)
- ・盛り上がったが、周りの教室はテストや授業をやっていたようなので、うるさかったかもしれない。

良かった点

(メンバーの意見)

- ・目標が達成できた
- ・名札の色分けは良かった
- ・意外とループが盛り上がった
- ・準備ができなかった割に人の動きが良かった
- ・チーム対抗になって盛り上がった
- ・初日は先生が、2日目以降はガヤン、ハルシャナが通訳を頑張ってくれた
- ・ことばがなくても仲良くなれることがわかった。

(企画責任者としての意見)

- ・目標(後の活動につなげる、仲良くなる)が達成できた。
- ・各グループのメンバーも自分の仕事(グループを盛り上げるなど)を確実にやってくれた。

反省点

(メンバーの意見)

- ・前日の打ち合わせ 資料がなかった
- ・グループ分けがうまくいかなかった。特に男女比。
- ・輪投げが全員に回らなかった
- ・流れがうまく示せなかった、意図が伝わらなかった

- ・メリハリがつかなかった
- ・想定外を想定できるように
- ・最後のフリータイムで子供が飽きた
- ・委員会メンバーのけじめがつかなかった 意図が伝わらなかった
- ・現地での準備が多かった
- ・前回よりも予想外のことが多かった ミーティングにかかった時間が多かった
- ・前日のルフナとのパーティが原因、食事時にミーティングができなかった。
- ・ルフナとの連携が取れなかった わからなかった
- ・前日の打ち合わせ あまり伝わってなかった
- ・子供にルフナの人の紹介をしなかった
- ・司会の前日の打ち合わせが必要
- ・英語ができる子とできない子がいる 学年によって差
- ・グループ内で全員が仲良かったか？ 結果的には良

(企画責任者としての意見)

- ・ルフナの学生に企画の意図が明確に伝わらなかった。(前日に「伝えるだけ」ではなく、ミーティングなどを持つべきだった。)
- ・企画時間を余分に取っていたのだが、それがグループに入っているメンバーには負担だった。
- ・アイスブレイキングで「楽しむ」ことはできたが、掃除企画、リージョナルディスカバリーなど「教える」がメインの企画について、けじめ、メリハリがつけられなかったので、今後のアイスブレイキングにも、「遊ぶ」だけに焦点をあてず、「けじめ、メリハリ」をつけることを目的にしたほうがいい。

今後の展望

アルガムベイを経験しているメンバーが少なく、またマータラに転用できることも少なかった。そして、比較的都会で南部のマータラと田舎といわれる東岸部のアルガムベイという2つの場所での実施経緯を持つことができた。また、地理的な違い以外にも子どもたちの違いなど比較できる要素が増えたことが今回得たことのひとつだと思う。今後、活動を企画運営していく上で、経験を踏まえてよりよいものを作って行きたい(いってほしい)。

子どもたちについて、どこの国の子どもも似た部分はあると思うが、違う部分というのは確かに見て取れて、それはその国の文化に影響を受けていると感じた。たとえば、子どもたちだけでなく大人も音楽がすきで生活の一部になっているということ。今回の現地訪問の経験を、今後の海外での活動に生かしていきたい。また日本へ伝えていくことも平行してやっていけたらいいと思う。

5 . Regional Rediscovery Project(Day 2)

(1)企画書

企画概要

実施日時 08/31 Thurs. 08 : 35 ~ 11 : 20
実施場所 Kotuwa Janadhipathi Vidyalaya School 教室 および matara 市内
対象 Grade6 (30名 ~ 45名程度)
企画責任者 可知健太郎 (立命館大学政策科学部 2回生)

スタッフ

司会進行 可知・服部
補助 田村
タイムキーパー 中木・間中

資機材

レクチャー用資料 50部
フィードワーク用資料 50部
えんぴつ 50本
アンケート用紙 50部
発表用模造紙(地図) 1枚

8:00 学校到着・準備開始

Regional Rediscovery Project

8:35 ~ 9:15 **レクチャー** <40分>

9:20 ~ 10:20 **フィールドワーク** <1時間>

- ・ 学校 1班 =
- ・ 2班 =
- ・ 3班 =

10分間休憩

10:30 ~ 11:10 **フィードバック** <40分>

11:10 ~ 11:20 **発表・総括** <10分>

10分間休憩後、Clean Education Projectへ

Clean Education Project

11:30 ~ 12:00 **掃除の時間** <30分>

- ・ 学校 1班 = 廊下
- ・ 2班 = 建物外
- ・ 3班 = 教室

掃除終了後、教室へ再集合（終礼？）

(2)実施にあたって

変更点

- ・一班あたりの生徒の人数が多かったので、グループリーダーは実行委員会のメンバーから1人選んだ。
- ・時間短縮のためレクチャー、フィールドワーク用のペーパーは事前に配るようにした。
- ・1日目の企画の反省からルフナの学生との連携を意識し、各班に補助としてついてもらうようにあらかじめ指示を出した。また、ルフナの学生一名に通訳として前に出てきてもらい、子どもたちが企画の意図を理解しやすいように、説明が難しい部分をシンハラ語で訳してもらった。
- ・小学校周辺は予想していたより観光資源と成りえるものが多く存在していたので、目的地はあらかじめ指定せず、グループリーダーとルフナの学生を中心に話し合ってもらい自由に決めてもらった。
- ・フィールドワーク中の実行委員会のメンバーの配置を決め、子どもの安全確保に努めた。
- ・アンケート用紙が足りなかったので、口頭で聞き、手を挙げてもらうという形式をとった。

授業の様子

司会役は可知・服部が担当し、前に出て企画の進行・説明を行なった。また前日の反省を生かし、子どもたちが理解しにくいと思われる部分を、ハルシャナ（ルフナの学生）にシンハラ語で訳してもらうという形式をとった。

全体のレクチャー以外はグループでの作業が中心だったが、メンバーとルフナの学生、現地小学校の先生などの協力により、スムーズに企画を進めることができた。

この企画は他の企画と比べ学習という要素が強かったが、子供たちは積極的に取り組んでくれた。授業の最後にアンケートをとった。

よかった点

京都における観光資源についてのレクチャーではレジメに写真を多くつけていたので、興味を持って話を聞いてくれた。その後のフィールドワークの導入では、各班のグループリーダー、ルフナの学生が中心となり班をまとめてくれたおかげで、スムーズに進めることができた。

その後、各班に分かれて地域のよさを探しにまちに出かけたが、子どもたちはフィールドワーク用のペーパーに気づいたこと、感じたことなどをしっかり記入していた。またメンバーも、積極的に子どもたちとコミュニケーションをとるように努めた。一番心配していた安全面での問題がなく、移動方法は成功だったと言える。

やはり子どもたちと、ただ教室でコミュニケーションをとるだけでなく、外へ出向いた

ことによって、体を動かしながら子どもたちと同じものを見て・触れて・感じることできた点が一番良かった。

全体的に各班のメンバーの応用力が求められる内容だったが、個人個人が役割を果たしてくれたおかげで成功することができた。

反省点

反省点は大きく分けて2つあり、一つ目がフィールドワークで2つの班の目的地が重なってしまった点と、二つ目がフィードバック部分での発表形式・内容に対しての指示が不明確だった点である。

特に目的地が重なった場合の対処法を考えておらず、大きな混乱はなかったものの、人数把握が難しく、行動に制限ができてしまった。

学校に戻ってからはグループワークを用いて各班で意見をまとめてもらい、代表者に発表してもらったが、発表形式を統一していなかったため、シンハラ語で話す班や英語で話す班、発表人数など各班によって違いがでてしまった。また、発表者の声が聞きづらい、見にくいなどの問題が生じた。

最後に授業のアンケートをとったが、アンケート用紙が足りなかったため、口頭で聞き手を挙げてもらった。周りを見ながら手を挙げている子どもたちが多く、各班のよって意見に偏りがでた。

アンケート結果（有効回答数 63 人）

1. 授業はどうでしたか？

楽しかった・・・43人 普通・・・20人 楽しくなかった・・・0人

2. 今日のフィールドワークで何か新しい発見がありましたか？

あった・・・38人 なかった・・・25人

3. 2の質問で と答えた人はどんな新しい発見がありましたか？

町が美しい、海がきれい、時計台がよかった、ブッタの像がよかった、お寺がよかった

4. あなたは将来マータラをどんな町にしたいですか？

発展した町、きれいな町、道が整備された町、健康な町、平和な町、中心的な町、有名な町、空港がある町

感想

2日目の活動を通して感じたのは、子どもたちの素直さとマータラに対する愛着心である。レクチャーの内容などは簡単ではなくどこまで伝わったかはわからないが、子どもた

ちは一生懸命私たちの言葉に耳を傾け、積極的に取り組んでくれた。一番心配していたフィールドワークも反省点はあったものの、無事終えることができた。

今回の企画は直前にプロジェクト地域が変わったこと、現地情報が不足していたことなどにより、実際に行ってみないとわからない部分が多々あった。そのため、企画内容を決める段階で、不安要素からくる意見の変動が大きく作業の進行が大幅に遅れた。これは企画責任者である私の計画性の欠如と、メンバー一人一人の企画に対する参加意識が薄かったためだと思われる。直前の作業や現地に行ってから決定事項が多く、メンバーには負担を強いる結果となってしまった。

しかし、日本で企画を練る段階で様々な不安要素を想定し、話し合いを行っていたおかげで、当日は各班のメンバー臨機応変に対応し、現地ではそれほど混乱することなく進めることができた。応用力は事前の準備が成せる技であり、自分の知らない場所で今回のような活動を行なう場合は現地での状況を想定し、議論しておくことの重要性を学んだ。

今後に向けて

今回の活動によってマータラの良さを再発見してもらうことはできなかったかもしれないが、彼らがマータラというまちを愛していたこと、私たちにそれを伝えようとしてくれているのは十分伝わってきた。そして彼ら自身が自分たちのまちを見つめなおし、何かを感じてくれていれば、その気持ちが行動へとつながり将来に生きるはずである。例えば、地域を歩く中で目についたのは、道端のあちこちに散乱するゴミである。マータラだけでなくスリランカは本当に美しい国であり、この問題を解決できれば今よりもっと光り輝く島になるはずである。

私たちはそんな「考えるきっかけ」を子どもたちに与えられるようにこれからも活動を続けていきたい。

6 . Kids Activity Project(Day 3)

(1)企画書

企画概要

実施日時 09/01 FRI. 08:35～10:40、11:20～12:00
実施場所 Kotuwa Janadhipathi Vidyalaya School 教室
対象 Grade6 (30名～45名程度)
企画責任者 橋本雪 (立命館大学文学部 3回生)

スタッフ

司会進行 橋本・柳生

資機材

アルバム	3冊
世界地図	1枚
お箸	20組
お箸で掴むもの	約20個
筆ペン	20本
半紙	200枚
折り紙	250枚
ポスター用模造紙	3枚
クレヨン	3パック
マジック	3パック
ビデオレター用模造紙	3枚
ビデオカメラ	1式
ポラロイドカメラ	1式
新聞紙	6部程
キャンディ	3袋



8:00 学校到着・準備開始

Kids Activity Project

8:35 ~ 9:40 **文化紹介** <1時間5分>

- ・ 学校 1 班 = お箸 筆ペン 折り紙
- ・ 2 班 = 筆ペン 折り紙 お箸
- ・ 3 班 = 折り紙 お箸 筆ペン

9:40 ~ 10:40 **レッツ・メイキング** <1時間>

Clean Education Project

10:40 ~ 11:10 **掃除の時間** <30分>

- ・ 学校 1 班 = 建物外
- ・ 2 班 = 教室
- ・ 3 班 = 廊下

10分間休憩後、Kids Activity Projectへ

Kids Activity Project

11:20 ~ 12:00 **ビデオレター撮影** <40分>

撮影終了後、教室へ再集合（お別れ）

(2) 実地にあたって

変更点

- ・対象人数が 30～45 人を想定していたが実際は 60 人で実施。
- ・前日に、小学校側から最後にお礼の挨拶やパフォーマンスがあると聞き、企画時間しなければならず、予定より早く開始し、文化紹介を短くするなどして対処。
- ・英語があまり通じないためルフナ大学の学生が通訳として参加。

授業の様子

企画の 3 日目ということもあり、子どもたちとメンバーの距離もかなり近くなり、とても良い雰囲気で行うことができた。授業の進め方としては、橋本・柳生が英語で司会を担当し、ルフナの学生がそれをシンハラ語に通訳する形となった。その他のメンバーも各班に入って子どもたちに指示をしたり、折り紙やお箸の持ち方を教えるなどのサポートをしてくれた。子どもたちもよく話を聞いて一生懸命やっていた。レッツ・メイキングでは私たちが予想していた以上に子どもたちが熱心に絵を書いてくれ、すばらしい出来ばえとなった。ビデオレターでは紙にローマ字で日本語を書き、それをみながら日本語でメッセージを作った。大勢で声をそろえるのは大変だったが、何度か練習してなかなか良いものができた。

良かった点

日本文化紹介で体験するものを折り紙・お箸・筆ペンと 3 つだけに絞ってやったのが、時間的にもバランスよく、子どもたちも楽しそうにやっていたとても良かった。各班のメンバーがルフナの学生らと協力して、子どもたちに個別に対応して、できない子やわからない子を助けたりして、どの班もまとまっていた。レッツ・メイキングでは模造紙が各班に 2 枚しかなかったが、交代で書いたり、相談しながら絵を描いている子どもたちがいて、仲良くみんなで 1 つの作品を仕上げる事ができた。帰国後、立命館小学校を訪問し、レッツ・メイキングで作ったポスターとビデオレターを無事子どもたちに届けることができた。

反省点

- ・予想以上の人数に筆ペンやマジックなどの備品に不足がでた。
- ・子どもたちの誘導や静かにさせるのに時間がかかった。
- ・人数が多いこともあり、前での説明やレッツ・メイキングの後で書いた絵の発表をした時に見えない生徒が多かった。
- ・筆ペンを教えた時に書き順をちゃんと教えればよかった。
- ・企画の感想を聞くべきだった。
- ・時間がなかった。

7 . Clean Education Project

(1) 企画書

企画概要

実施日時 08/30 Wed. 11:15~12:25
08/31 Thurs. 11:30~12:00
09/01 Fri. 10:40~11:10

実施場所 Kotuwa Janadhipathi Vidyalaya School 教室・廊下・建物外
対象 Grade6 (30名~45名程度)
企画責任者 間中光 (立命館大学産業社会学部 2回生)

スタッフ (レクチャー部分)

司会進行 間中・岩淵
補助 田村・服部

資機材

レクチャー部分

レクチャー用模造紙 5枚
写真(5種類) 4セット

教室の掃除

ほうき 5本
ちりとり 5組
雑巾 15枚
バケツ? 1つ
ゴミ袋 1袋×3日分

廊下の掃除

雑巾 15枚

建物外の掃除

ゴミ袋 2枚×3日分

掃除終了後(手洗い・シール)

シール 150枚程度
石鹸 5個
石鹸入れ? 5個

《目的》

- 1、子ども達に掃除への興味をもってもらう
- 2、子ども達に掃除の必要性、よさを理解してもらう。
- 3、子ども達の中で掃除が習慣化する一助となる。

《企画内容》

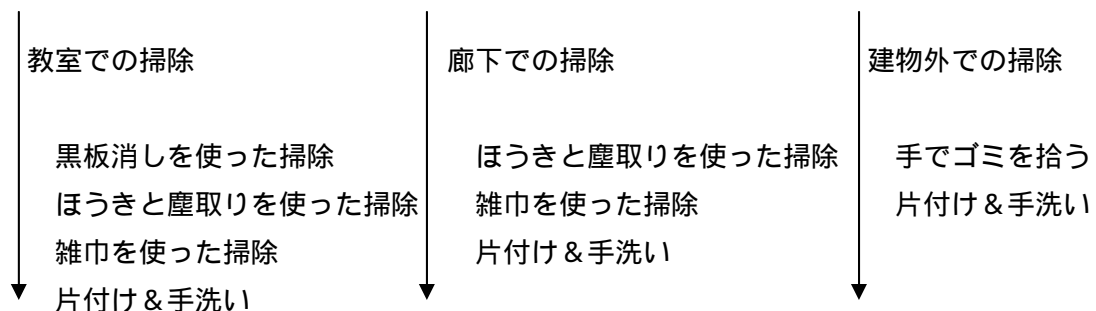
DAY1 110分

【掃除教育授業】 30分

- ・ 「掃除の時間」の説明
- ・ 掃除する良さを考える
- ・ 掃除クイズ

【移動時間】 5分

【掃除タイム 1日目】 30分

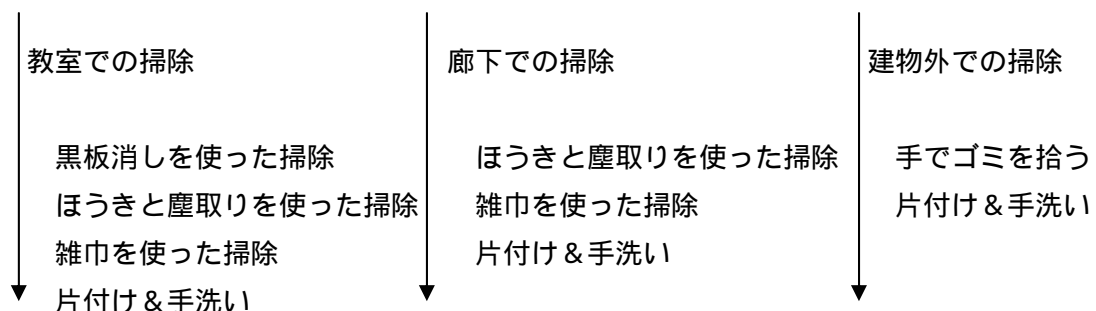


3グループに分け並行して行う

・ポイントカードにスタンプを押す 5分

DAY2 30分

・【掃除タイム 2日目】 25分



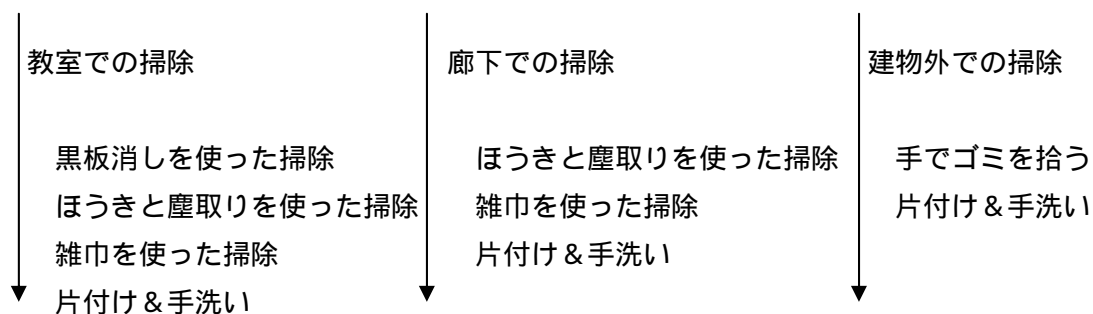
3グループに分け並行して行う

・ポイントカードにスタンプを押す 5分

DAY3 35分

・【掃除タイム3日目】

25分



3グループに分け並行して行う

- ・ポイントカードにスタンプを押す 5分
- ・記念撮影 5分

〈その他〉

- ・ 私たちは子ども達に「掃除」を楽しんでもらうよう心がける

(2)実施にあたって

変更点

DAY1 終了後、廊下掃除を担当したメンバーから、廊下が屋外にあり予想以上に砂がたまっていることから雑巾がけが適さないこと、休み時間になると他クラスの生徒が廊下を行き交い雑巾がけをするスペースの確保が難しいこと等の報告を受けた。また教室掃除を担当したメンバーからは教室で掃き掃除を行うと予想以上にほこり、砂が舞い上がり子供達や先生方が咳き込んでいたとの報告を受けた。そこで DAY2 からは廊下でほうきとちりとりを使用した掃き掃除を行い、教室では雑巾で机やイス等を拭く拭き掃除を行うことにした。

3日間の様子

レクチャーは司会の間中、岩淵がセリフを英語で述べ、それをルフナ大学の学生がシンハラ語に直し、子供達に伝えた。同時にレクチャー内容をまとめた模造紙や立命館小学校の掃除の様子を写した写真等を使い子供達がより理解しやすいように努めた。実際に掃除を行う際には子供達を3グループに分け、3箇所の掃除場所を3日間でローテーションし、各班のリーダーを中心に簡単な英語やジェスチャーで掃除のやり方やポイントを子供達に伝えた。また先生方も企画内容を理解して下さり、事前にバケツに水を入れておいて下さるなど積極的に協力して下さった。私達が心配していた掃除することへの抵抗感はずいぶん子供達からはさほど感じられなかった。

よかった点、反省点

<レクチャー>

模造紙や写真などを使い、視聴覚的に訴えたことにより子供達の興味を引くことができた。またレクチャー内容を確認するクイズにおいて、メンバーがジェスチャーを使って問題を表現したことは子供達の積極的なクイズ参加につながった。

Ice Breaking Project の雰囲気のままレクチャーに入ってしまったので子供達の中で切り替えが難しく、集中しづらかったように感じる。座る位置を変えるなどの工夫をすべきだった。またクイズ以外はメンバーから子供達への一方的なものになってしまった。レクチャーと掃除の時間を分けるのではなく実際に掃除をしながら知識を伝えるという形の方が子供達により伝わりやすかったのではないかと思う。

<掃除の時間>

毎日、掃除終了後に子供達の名札の裏にシールを貼ってあげたことは、子供達が掃除を楽しんでもらう一助となったように思う。また3日間とも異なる場所で掃除をしたことで、多くの掃除の方法を子供達に教えることができた。今企画は掃除場所など学校へ行ってから変更した点が多かったが、それぞれのメンバーが臨機応変に対応し、スムーズに企画を進めることができた。

子供達を3班に分けたもののそれでも子供達の数が多く、全員をケアできなかった。またレクチャーでは大まかな掃除道具の使い方しか伝えなかったため、子供達は、ほうきを細かく動かす、雑巾を絞るときはバケツの上でしっかり絞るなど、それぞれの掃除道具のポイントを理解していなかった。またメンバーも掃除を進めることに追われ、それらのことを、時間をとって伝えることができなかった。

今後に向けて

今企画で、私達は、子供達に「どうやってゴミを掃除するか」という点をポイントにして伝えた。しかし机を拭くためになんのためらいもなく机の上のゴミを床に落とす男の子や、掃除後のお昼休みに、自分の食べたお昼ご飯の残飯を、掃除した溝に捨ててしまう女の子を見て、私達はポイントが間違っていたことに気付いた。私達が本当に伝えなければならなかったのは「ゴミはゴミ箱や決まったところに捨てなければいけない」という事であった。次回、同様の企画を実施する機会があるならば、是非、そのようなポイントを中心に企画を考えたい。

8 . Research project

(1) 企画書

企画概要

1) 実施場所

スリランカ南部マータラ（市街地・観光地・市役所・ホテル）
ウダワラウエ国立公園(9月4日)

2) 実施時期

実施日：2006年8月30日及び9月1日
実施時間：1日目2時30分～4時
2日目2時～5時

3) 調査対象

外国人旅行者（両日に各班ともに調査）
現地住民（両日に各班ともに調査）
ホテル従業員（時間外で調査班が調査）
政府関係者（2日目1班のみ調査）

4) 調査形態

外国人観光客に対するアンケート用紙による調査
現地住民、ホテル従業員、マータラ市長に対するヒアリング調査

5) 実施スタッフ

1日目...3班各9名
学生実行委員4～5名
通訳...ルフナ大学の学生3名
現地アドバイザー（ラタナさん、ラマニさん、チンタ先生）1名
2日目...6班各3～4名
学生実行委員2～3名
ルフナ大学の学生もしくは現地アドバイザー1～2名
企画責任者 田村将人(政策科学部2回生)

資機材

調査ボード	3つ
外国人観光客アンケート	50部
国立公園アンケート	10部
おみやげ（ボールペン）	約50本

(2)実施にあたって

1.経緯

2004年のインド洋大津波は、スリランカに未曾有の大災害をもたらした。特に観光に大きな打撃を与えた。現在、被災地域の復興が進む中、観光客は戻りつつあるが、地域住民への経済波及効果は小さいままである。とくに今回のプロジェクト地域であるスリランカ南部のマータラは元々観光地としては知名度が低く、日本から訪れる観光客も少ないのが実情である。その現状を踏まえ、マータラでの地域復興に貢献するための事業を企画することになった。

近年、サステイナブル(持続可能であること)という言葉が、時代のキーワードになっているように、観光の分野においても、エコツーリズムといった訪問地の自然や文化的な価値を持続的に守るようなあり方が求められている。そこで私たちは、生物多様性にとんだスリランカにエコツーリズムを導入することで、将来的に持続的な観光が地域の経済を支える土台となることを目的とし、スリランカにおけるエコツアーを企画する。

2.目的

- 1) スリランカ南部(マータラ)周辺で、観光業に携わる人及び、地元住民にヒアリング調査をすることで、地域観光の現状・観光資源を模索し、観光マップ・ツアープランの作成の資料にする。
- 2) 外国人旅行者が感じるマータラの魅力や現地での行動を調査し、日本人観光客に対して新たな旅行プランの提示ができるようにする。
- 3) 観光産業に対する地元住民の考えやニーズを調査し、将来的なエコツアーの実現可能性と、今後考えられる課題を検討する。

3.調査内容

1) 実施場所

スリランカ南部マータラ(市街地・観光地・市役所・ホテル)

2) 実施時期

実施日：2006年8月30日及び9月1日

実施時間：1日目 2時30分～4時

2日目 2時～5時

3) 調査対象

外国人旅行者(両日に各班がそれぞれ調査)

現地住民(両日に各班がそれぞれ調査)

ホテル従業員(時間外で調査班が調査)

政府関係者(2日目1班のみ調査)

4) 調査形態

外国人観光客に対するアンケート調査

現地住民、ホテル従業員、マータラ市長に対するヒアリング調査

5) 実施スタッフ

1 日目...3 班各 9 名

学生実行委員 4~5 名

通訳...ルフナ大学の学生 3 名

現地アドバイザー（ラタナさん、ラマニさん、チンタ先生）1 名

2 日目...6 班各 3~4 名

学生実行委員 2~3 名

ルフナ大学の学生もしくは現地アドバイザー1~2 名

4 . 調査結果（調査対象人数：約 70 人）

4-1 マータラのお勧めスポット（複数回答可）

・ Please tell me about Matara's sightseeing points. （マータラの観光地でどこがお勧めか？）

ポルフェナビーチ	31	マータラビーチ	8	サラカコトゥーフ	4
ヴェヘラヘナ寺院	25	フォート	7	ヴォネラカハラ寺院	4
スターフォート	15	メリッサビーチ	6	ダヴィナワラ灯台	3
デウダラ寺院	12	マータラ寺院	6		

*1 票以下は除く

考察

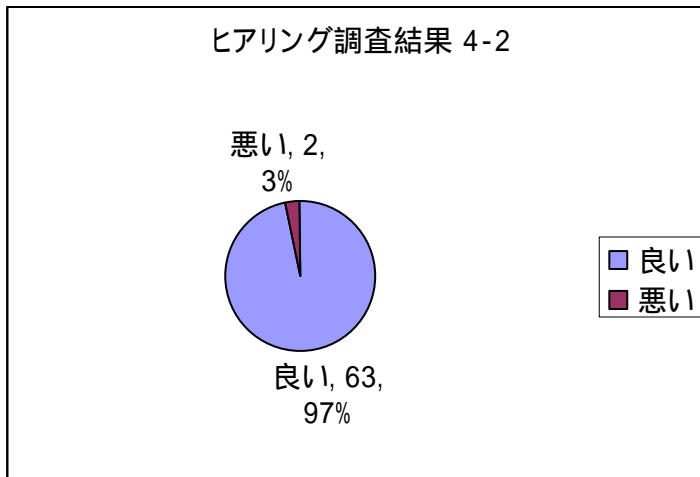
現地のお勧めスポットとして多くの住民が、真っ先に口にするのがポルフェナビーチである。このビーチは私たちが泊まったホテルの近くにあり、実際に泳ぐことができたが、水が澄んでいて本当にきれいなビーチだった。現地の人は大勢利用していたが、外国人観光客の姿は見るができなかった。二番目に多かったのがヴェヘラヘナ寺院で、この二つの観光地は地球の歩き方にも掲載されており、現地の人にも観光地として認識されているということがわかった。

ローカルスポットとしてはゴレガマ（鳥の森、マータラから 6 キロの最近できた小さな国立公園）、フンマーネといった意見があったが、詳細については現在調査中である。

4-2 . マータラに観光客が来ることについて (有効回答数 65)

・ How do you think that foreigner come to Matara? It's good or bad?

(マータラに観光客が来ることについてどう思いますか?)



主な理由

肯定的な意見

経済的に良い影響を与える (15人)

Ex) ・ 仕事、雇用が生まれる。

・ 観光客がお金を落とすことで

生活ができるようになる。

・ ビジネスチャンスが増える。

その他の意見

・ 文化の保護に役立つ。(1人)

・ 外国人観光客との交流を楽しむ。

(1人)

・ ものをもらえる。(1人)

否定的な意見

文化が破壊される可能性がある (2人)

その他の意見

・ 自然環境が破壊される可能性がある。(1人)

・ 観光の従事するため学校に行かず朝早くから働く子どもがいるのはよくない。(1人)

・ 水着をつけたまま街を歩くのはよくない。(1人)

考察

マータラに観光客が来ることについては、63人(97%)の人が肯定的に捉えていた。その理由としては、スリランカの経済や自分の商売にプラスになるといった意見が圧倒的に多く、これは商売を営んでいる人が多いということと関係している。反対に、悪い点はないか尋ねると「ない」と断言する人が圧倒的に多かったが、一部では自然や文化が破壊される可能性や、若年期からの労働を危惧している人もいた。実際にホテルでは私たちと同じか、あるいは少し若い年代の子どもが働いていた。しかし多くの人はいったデメリットを考える余裕はなく、まずは観光客が来ることによる経済効果を期待しているといえる。

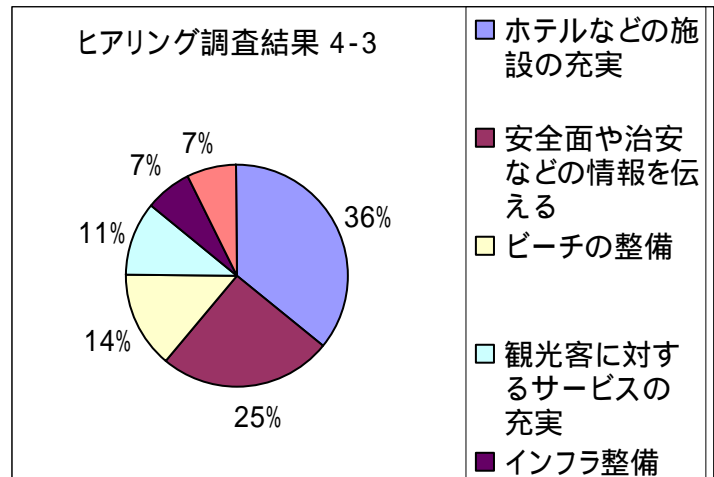
また、実際に津波の影響で観光客が減ったと答える人は多かったが、今は少しずつだが戻りつつあるとう意見も聞くことができた。

4-3. どのようにすれば観光客が増えるか（有効回答数 28）

・ What do you think what to do to increase tourist ?

（どうすれば観光客が増えると思いますか？）

ホテルなどの施設の充実	10 人
安全面や治安などの情報を伝える	7 人
ビーチの整備	4 人
観光客に対するサービスの充実	3 人
インフラ整備(道路、ゴミの清掃)	2 人
その他	2 人



具体的な意見

観光客に対するサービスの充実

- ・ 観光の調査をする。
- ・ 観光客にマータラのもっといいところ（文化や歴史がある観光のお勧めスポット）を紹介する。
- ・ 観光客向けのツアーを増やすべき。

その他の意見

- ・ 内戦をやめる。
- ・ 政府の動きがよくない。（援助を必要としている人はまだいる）
- ・ ダイビングポイントやナイトクラブ、ディスコが必要。

考察

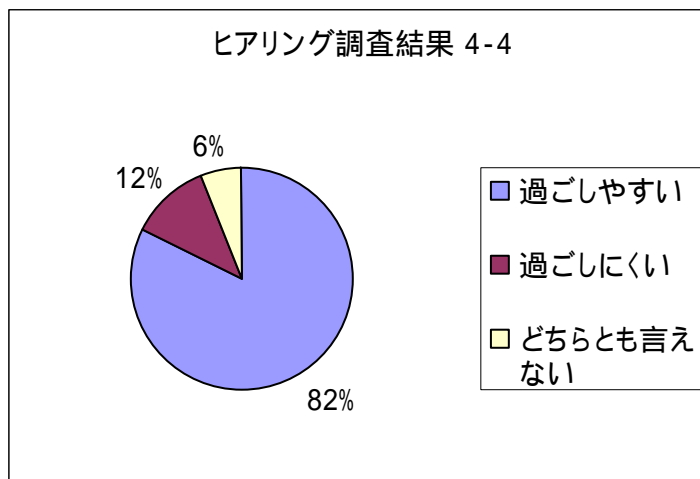
どのようにすれば観光客が増えるかという質問に対して最も多かった意見はホテルなどの施設の充実だったが、これは今回の調査地域が津波で被害を受けたビーチ周辺だったことと関係している。津波の被害は予想していたより大きく、津波から 2 年近く経った現在でも、海岸部では被害を受けて壊れた建物や、建設中のホテル・ゲストハウスなどを目にすることが多々あった。

注目すべきは 2 番目に多かった、安全面や治安などの情報を観光客に知ってもらうという意見だ。情報量の少なさが、人々をスリランカ（マータラ）から遠ざけている原因なのではないかという私たちの仮説が、住民の意見によって立証された。

観光客に対するサービスの充実を挙げる人は予想より少なかったが、これは既にサービスをしているという意識が商店やホテルの人にあったためだと思われる。

4-4 . マータラは観光客にとって過ごしやすい町か (有効回答数 17)

(2) ・ Do you think Matara is comfortable city for tourist? (マータラは観光客にとって過ごしやすい(快適な)町だと思いますか?)



主な理由

肯定的な意見

- ・ ホテル、銀行などそれなりの設備が整っている。
- ・ コロンボほどではないがまちが発展している。
- ・ 人々がやさしい。

否定的な意見

- ・ 政治が不安定だから。
- ・ 津波の前まではマータラは最もいい場所だったが、今はそうでもない。

考察

全体的に見ると過ごしやすいと答える人が多く、主な理由としてはホテル、銀行、ビーチなど施設的な要素の充実であった。それゆえ 4-3 の質問においても、施設や設備の充実を訴える人が多かったと言える。

一方で不安定な政治や津波が原因で、否定的な意見を持っている人もいた。

4-5 . マータラ市長(メイヤー)訪問のまとめ

(1) マータラの特徴

スリランカの銀行がすべてある。本店がコロンボで、南部マータラ・中部マータレ・北部アヌダラプラにしかない(日本でいう日銀の支店)の銀行もある。また、株取引場もあり金融の街である。マータラはヒッカドゥア、デニヤヤ、ゴール、タンゴールなどに移動できる南部の中心地である。

(2) マータラの見所

「キララカリ」

マータラ市北部にある不毛の地

750 エーカーの荒地の中心に川が流れておりその周辺がジャングルの様になっている。その

周辺に固有の動植物がたくさんいる。政府がポートツアーを計画しているがスポンサーがいなく探している。キララカリは市街地に比べ気温が低く、少しの移動で hot と cool が気軽に味わえる。

「マータラビーチ」

韓国政府の援助により近い将来ビーチが整備される。

「ポルフェナビーチ」

自然が多い、サンゴ礁

他にも、野鳥の国立公園（調査結果 4-1 考察参照）が建設中である。ポルフェナリーフガーデンから見える島にある遺跡は、150 年前に台湾の王子が建てた建物である。

（ 3 ） 観光関連の政策

「交通」

・ 高速道路

コロンボ・マータラ間で開通される。7～9 時間かかることが 2.5 時間に短縮する。

・ シティ・エリア・ロード

ヌーペ・マータラ間の 1 キロ区間が 2 車線から 6 車線に拡幅される。また、マータラは自転車が多いため自転車用道路・歩行者用道路もつくる。

・ 電車

現在コロンボ・マータラ間の電車がコロンボカタラガスまで延長される。Tissa も通るのでヤーラ国立公園の近くまでいける。

* 計画中（近い将来）

「商業」

南部州の中心地のことからも商業施設が多い。

「宿泊」

マータラの宿泊は質・数ともに充実している。

「歴史」

古い寺や、オランダの植民地だった雰囲気が残っている。

「文化」

ダンスショーや民芸品などを販売できるような総合ショッピングモールを建てる（予定）
ODA をもらって建てたい。

その他の計画として

川の歩道の整備や、フォート内の警察・軍隊施設を移動させる。他にも、12 月には新しい WEB サイトがリニューアルする。

5 . 全体を通しての考察

今回の調査では観光客が求めるニーズと、観光産業に対する地元住民のニーズや考えとを比較することによって、そこから今後考えられる問題や課題を検討し、将来的に持続的な観光産業が地域経済の基盤となることを目標とした。

現地の多くの人々は観光客が来ることで、自己もしくは、マータラの経済効果を期待している。数人の意見では、ナイトクラブやディスコの必要性を訴えていた。娯楽施設は観光地に必要なものなのかもしれないが、乱立すると住民の生活を変えてしまう要因になってしまう。反対に、観光客が来ることでマイナスになると答えた人は、20~30代の2人だけであり、「外国人によって環境が破壊されてしまう」という意見を持っていた。今回は商店主を基本にヒアリングしたので、平均的に年齢層が高めであったが、若年層にはエコツアーリズムのような考えを持っている人が多く存在するのではないだろうか。観光開発のあり方についてスリランカでも世代間で変わりつつある。

他にも、外国人観光客との会話や、歌ったり踊ったりといったコミュニケーションを楽しんでいる人が多かったのも特徴的だった。現地の人と触れ合えやすい環境があることはエコツアーを組むことにとってもメリットになる。しかし多くの方は経済的にここまで考える余裕がないのが現状である。

スリランカ人は独立心が強い人が多く、小さくてもいいから自分の店や車（スリーヴィー）を持ちたがる傾向があり、彼らの多くは、外国人観光客が自身の商売のために来ることを望んでいた。今回私たちが街を歩いていると気になる建物が多くあったが、何かわからないままであった。外国人観光客が気軽にマータラを知ることができるように、商店主や運転手が現地の歴史や文化などのガイドができるシステムはつくれないだろうか。それと同様にウダワラウェ国立公園でも、ガイドは同行するが動物の詳しい名前などの情報がこちらまで伝わらなかった。動物に関する知識が無いのか、英語のレベルが低いのかはわからなかったが、観光客が珍しい動植物を観に来ているにもかかわらず、それを説明できないようでは意味がない。ガイドの質を上げることが重要であると考えます。

6 . 反省

一番の反省点は、日本に居た段階でそれぞれの調査企画で進行度合いに差があり、準備段階で調査目的や方法を委員会メンバー全員で共有できていなかったことである。そのため、現地のスタッフに対しても説明不足になり、各班の調査結果にかなりのバラつきが出てしまい統一性・一貫性の欠けるものになってしまった。その上、準備不足のため現地での変更が多く混乱を起こしてしまった。

またマップやエコツアーのパッケージを作るために現地のお勧めスポットを聞いたが、それに対しての詳しい質問や、地図上での位置確認をしなかったため、ただ観光地の名前を聞くだけの結果になってしまった。

質問や集計を簡単にできるように、外国人観光客以外にもアンケート用紙を作っておくなど、考えられる余地はたくさんあった。また、想像していたよりも体力を消費し、調査後の情報交換や調査方法の改善をする時間をあまり設けられなかった。

7. 調査結果を踏まえた今後の展開

現地の人々の多くは観光客が来ることによる経済的効果を期待しており、これは当初から私たちが予想していた通りの結果であった。今後、インターネットをつかった情報発信（マップの作成）や持続的なエコツアーのあり方（パッケージ作り）を私たちが提案することによって、スリランカやマータラで暮らす人々にとってプラスの影響が働くと考えられる。

今回の調査でも明らかとなったが、マータラにおける観光客の少なさは情報量や知名度の低さであり、これを解決する手段を現地の人々は持ち合わせていないと言える。つまり今後私たちが、産官学連携をもとにした情報発信を行なうことにより、マータラの治安・安全面や魅力などを多くの人に知ってもらい、観光客誘致へとつなげていきたい。

8. 感想（企画責任者田村）

何よりも、小学校の企画で疲れた跡にメンバー全員が本当にがんばってくれたと思う。私自身は企画の甘さを痛感し、みんなに申し訳なく感じた。準備不足と共有不足であまりいい結果を持って帰ることはできなかったが、持ち帰った結果は集約・考察し、Webページの作成やツアーのパッケージの作成に役立てたい。この企画を通して、海外での社会調査の難しさを感じると同時に、今回のルフナ大学の学生のような現地の人々の助けが必要だということがわかった。今回の経験を今後絶対活かしていきたいと思う。

9. 準備段階で起きた問題点とその対応

情報不足の解消

今回も支援校のあるアルガムベイでの活動継続を予定していたが、スリランカ国内の情勢悪化でマータラへと活動地が変更になった。マータラを訪問した経験のあるメンバーが学生実行委員会におらず、現地の情報は外部からの提供に頼らなければならなかった。坂田氏や訪問先の学校などを通じて情報を得ていたが、学校の設備など現地に着くまで分からなかった事も多かった。情報不足を解消して活動にのぞめなかったため、現地の先生方やルフナ大学の学生たちなど、に多くの方々に助けていただいた。

プロジェクト費用・渡航費用について

渡航費用は奨学金として支給された1万5千円以外は、全額個人負担となった。

プロジェクト費用については、今回は特別に国際部国際協力事業課より支出していただけることになった。

現地対象学年の決定

前回の訪問は6年生の子ども達を対象にしたので、今回もそれに近い年齢の子ども達を対象にしようと考えた。対象学年を選ぶ際、子どもたちの企画内容に対する理解力やコミュニケーションをする上で重要な英語の会話力など重視した。それらに加えて渡航する学生の人数や経験も考慮し、対象学年と参加人数を学校側との話し合いの上決定した。

安全確保について

2006年4月頃よりスリランカ国内でテロや小規模な戦闘が多発するようになった。不安定な情勢下なので不測の事態に備えて以下のような対処を行なった。

- ・ 自由行動の時間も含め必ず集団での行動を義務化し、各グループ最低一台は携帯電話を持ち、すぐ連絡がつくようにした。
- ・ 前は各自の責任による旅券手配が、大学による手配となった。
- ・ 夕食後の外出は一切禁止した。

健康面に関しては、生水を飲まない事を徹底した。虫を媒介とする病気にかからないように、携帯できるベープや虫除けスプレーなど虫除け対策もとった。

シンハラ語圏の言語の差について

小学校での企画、マータラ市内で調査企画の両方でルフナ大学の学生が言葉の架け橋になってくれた。学生実行委員会のメンバーが英語で言った内容を彼らがシンハラ語に翻訳してくれたおかげで、子ども達に企画の詳細が伝わり、活動を円滑に進めることができた。

調査企画においても、彼らが間に入ってくれた事で質問の対象になった人々の緊張が和らいだ。回答者のシンハラ語での返答を英語に言い直して、学生実行委員会のメンバーに教えてくれたので、滞りなく調査を進めることができた。彼らの協力が企画の成果に大きく貢献した。

学生実行委員会のメンバーも指差し会話帳などを使ってシンハラ語を勉強し、現地の人たちと挨拶程度は交わせるように努めた。英語と片言のシンハラ語、ボディーランゲージで、言語の差はあっても子ども達とコミュニケーションを図ることができたし、ルフナ大学の学生達とも親睦を深めることができた。

移動中や宿泊時も、ラタナ氏をはじめとしたNGO「荷車の会」現地スタッフの皆様のご尽力により、問題なく過ごすことができた。

現地スケジュールの決め方

渡航の時期は同行していただいた藤山先生が参加可能な日程に併せて、具体的なスケジュールを決定した。

スケジュールの内容に関してはひとつひとつの企画に対して、それらの企画が子ども達に与える影響やどうすれば興味深く参加してもらえるかなどを、何度も議論を重ねて決定した。

さまざまな視点から話し合いを重ねた結果、予定していた内容を現地到着後に変更しなければならなかった際も、臨機応変に対応する事ができた。

10 . 訪問メンバーへの質問

1 . スリランカでの食事はどうでしたか。

- ・甘口のカレーしか食べれない私にとって、カレーの辛さはかなりキツかった。
- ・マータラの名産のカード(水牛のヨーグルト)は絶品。
- ・バスの中で食べたカレーパンは人生で一番辛かった。
- ・果物と紅茶がおいしかった。
- ・思っていたより食べやすくおいしかった。ホテルの方や坂田さんの配慮のお陰だと思う。
- ・日本では食べられないタイプのカレーなどが食べられたためとても良かった。
- ・時々出会うものすごく辛いカレーに困らされたが、本場のカレーを食べれた。
- ・意外と口に合った。カレーにもいろいろなバリエーションがあって飽きなかった。
- ・そこまで「カレー三昧」ではなかった。

2 . スリランカ滞在中、及び帰国後の体調はどうでしたか。

- ・企画実施中は疲れを忘れる。ホテルに戻ると疲れがどっと出る。その繰り返しだった。
- ・睡眠時間の欠如から、若干疲れ気味ではあった。
- ・良好！おなかを壊すことなく、帰国後も元気でした。
- ・滞在中は睡魔との闘い。お腹を壊さなくてよかった。
- ・ずっと健康だった。誰1人体調を崩さずにすんで良かった。
- ・滞在中は最終日を除いて大丈夫だったが、帰国後かなり疲れが出た。
- ・寝る暇もないくらい忙しく疲れたけど、楽しく充実していたので体調を崩すことはなかった。しかし、帰ってからは死んだように眠り続けていた。
- ・体調は滞在中も帰国後も崩れなかったが、食べ物の変化があったからか、帰国後しばらく腹が緩い状態が続いた。
- ・多少おなかの調子が怪しいときはあったが、平均して体調は平常どおりだった。

3 . 子供たちにとって、何を一番感じましたか。

- ・子ども達の持つパワーに本当に圧倒された。
- ・津波の事を忘れてしまったのかと思うくらい元気だった。しかし、逆にそれが不安。
- ・こっちが押されっぱなしでした。あんなにも日本人は人気があるとは思ってみなかった。
- ・笑顔が印象的だった。あの笑顔を見て本当に今回頑張ったよかったと思った。
- ・まず思ったのが、明るくて笑顔がたえない子たちだなと思った。
- ・英語の授業があるだけあって、上級生はけっこう英語を話せていた。

- ・自分の気持ちを思ったままに表現する子どもが多いと思った。
- ・日本子どもたちや昔の自分に比べ積極的な子がとても多く、交流中も子どもたちに助けられたような感じだった。
- ・笑顔が明るくて、屈託のない態度で接してくれた。自分が彼らに励まされて活動を頑張れたような気がする。

4 . スリランカの人たちとうまくコミュニケーションがとれましたか？

- ・スリランカで英語が使えるて本当にありがたかった。英語は拙いものの、普通に英語で話せるような気がした。
- ・英語は必須だと思いました。でも7日間もいると最後の方はシンハラ語がちょっとわかるようになりました。
- ・もっと伝えたいことや、話したいことがたくさんあった。
- ・自分の英語力のなさを痛感した。もっと勉強しようと思った。
- ・自分自身英語がほとんど話せないの、思うように伝えられない部分もあったが、ジェスチャーで伝わる部分もけっこうあることに行ってみて気づいた。
- ・ノリがよくて楽しかった。
- ・ルフナの学生に調査など細かく内容を伝えたい時、英語力がなくとても悔しかった。
- ・あまりうまく出来なかった。英会話力のなさもあったが、それ以上に積極性が足りなかった。

5 . 今後に向けての展望(自分なりに被災地に対して何がしたいか etc...)

- ・被災国においてはその地域子ども達に対して日本人の僕たちだから出来る教育活動を行なっていきたい。国内においては被災国のよさを日本の子供たちに知ってもらう活動を行っていきたい。
- ・まず、スリランカが被災地であることをメンバーを含め、多くの人に認識・再認識してもらう必要がある。国内外問わず、防災教育は必要だ。
- ・もっと日本人にスリランカを知ってもらいたいです！そのために実際に行ってきた私たちがいるんところでスリランカの紹介をして行きたいです。
- ・被災地に住む人たちが、少しでも前向きに生きてもらえるように、経済的な側面からアプローチしていきたい。
- ・清掃活動の継続（自然に返らないゴミの回収など）
- ・子供たちに対しては精神的なケアだけでなく、教育として(たとえば防災教育など)何か出来れば良いと思う。他にも、経済的な支援もできればなお良し
- ・教育や調査など 子どもたちを中心に地域全体に対して何か活動をしていきたい。
- ・少しでも多くの日本人に現地の事を知ってもらい、関心を惹いて、現地を訪れる人を増やしたい。

・継続的な支援も大切ですが、マータラ・スリランカにこだわらず、何か前向きな“生きる力”を欲している地域へいきたい

6 . スリランカでの8日間を通して、感じたことはなんですか。

- ・スリランカにはスリランカの人々も気付いていない魅力がたくさんあるということ。
- ・今まで地図でしか見たことなかったとって小さな島だったけど、実際に行って来てたくさんの人や子どもの笑顔が輝く美しい島だと思いました。
- ・自分の人生は自分の物差しで計るということ。
- ・むこうの現状などをより多くの人に知ってもらいたいと思った。
スリランカにもう1回行きたいし、もっと色んな国(途上国)を見てみたいと思った。
英語がもっと話せたらいいのになあ、と思った。
- ・スリランカで活動できたことは良かったが、被災地の支援をするという意味ではいまいちというような気がする。今後の活動についてもっと考慮する必要があると思う。
- ・大津波という被害を受けた国であったが、街は復興していて人々は被害にあったことを感じさせることはなかった。しかし、街から離れた田舎の海岸部などの一部では、復興されていなかった。もっと僕たちができることがほかにもあったんじゃないかと思う。
- ・日本とは全く異なる文化や習慣に対する驚きと交流を通して共感するものを見つけられた嬉しさ。

11. 訪問メンバーによる感想文

3 回生として委員長として集大成に

産業社会学部 3 回生 久保裕一

今回、自分にとってスリランカという国を訪れたのは 2 回目であった。前回、訪れたのは昨年 10 月だったが、その時は実行委員会を代表しての訪問であり、今回のように多くのメンバーと共に渡航し、企画を行ったのは、僕にとっては初めてのことだった。また、この夏のスリランカ訪問は就職活動などを控えた僕たち 3 回生メンバーにとって時期的にもメインで活動するのは最後になると考え、集大成となる訪問にしようというのが、この訪問において設定していた位置付けであった。

さて、この訪問を今振り返ってみると、思うことはただただ「よかった」ということに尽きる。では、なぜこのような思えるに至ったのか考えようと思う。

まず、思い出されるのは、渡航前の心境である。正直に吐露させてもらおうと、準備期間を含め、出発直前まで非常に不安であった。これは、やはり 14 名という人数で行動することや出発直前まで不安定な現地情勢によって実施の是非が議論されていたことが大きな要因であったと思う。また、これらの不安は個人としての不安というよりも委員長として思う不安の方が大きな部分を占めていたのではないかと思う。果たして、14 人で約 1 週間ほとんどの人が初めて訪れる未知の国で、しかも言葉の通じない小学生相手に上手く企画を実施し、運営できるのだろうか。委員長として僕自身、しっかりとメンバーに気を配りまとめることはできるのだろうか。体調を崩したり、ケガをするメンバーは出ないか。また、現地情勢のことを考えると、事件や事故などに巻き込まれやしないだろうかなど数多くの不安が胸の中を渦巻いていた。

しかし、これらの不安も今となっては全て杞憂のものとなったと言えるだろう。というのも、現地での活動期間中、いくつかの失敗やとまどいはあったものの、全体を通じて、委員長として抱いていた不安が現実になることが全くなかったからである。今回の旅程では全員が集合したときに、体調について確認をし、気にしようと思っていたのだが、旅程の後半になるとメンバー全員からの元気を感じることができ、そういった確認を怠ってしまうこともあったほどである。

次は、渡航してすぐのことが頭に浮かんでくる。8 月 28 日午前中に日本を発ったのであるが、現地空港に到着したのは同日夜であり、またその日宿泊する Negombo のホテルに到着したのは、ややすれば日付が変わろうかという時間であった。このように遅い時間であったが、メンバーそれぞれ、ホテルの部屋を割り振り一度部屋に荷物を置きに行くなどした

後、ホテル 1 階に再集合した。そして、注意事項などを話した後、メンバー全員にこの訪問に「何を求めてきているか?」「どういったものを得ることができるか?」といったことを話してもらった。この時、強く感じたのは、メンバーそれぞれが話してくれた内容というよりも、その場の雰囲気についてだった。これは、どういうことかということ、まだこの時点では一体感をそこまで感じることでできる雰囲気ではなかったように思えたからである。確かに、長時間に及ぶ移動の後であり、大変な疲労感の中であったのは間違いのないのであるが。まだまだ、何でも話せて一体感を感じることができ、全員が 1 つのチームであるという意識を持てているかといえれば若干であるが疑問を感じる状況だったのである。しかし、この点についても、活動を進めていく中で、共に行動をしていく中で一気に誰の目にも明らかなるほどに改善され、学年も学部も様々なバックグラウンドも超えて、実行委員会という 1 つのチームとして最終的には活動ができたのではないだろうか。

3 つ目に思い出されるのは、Day 1 の活動を終えて、次の日の活動について話し合っていた夜のことである。Day 2 に実施する "Regional Rediscovery" について、全体でのミーティングが終わった後、ほとんど全てのメンバーが自主的に「明日、どのように動けば、子どもたちに安全にかつ楽しく活動してもらえるか」といったことなどを話し合っていたのである。この様子を見ていた時、委員長として大変嬉しく思えた。さらに訪問メンバー全員の意識が変わったのを実感できたなと切に思えた瞬間でもあった。

このように、全ての活動を共にしていく中で、全てのメンバーそれぞれが果たすべき役割を超えて、いろいろなことを考えながら自主的に積極的に活動できていたのをこれまで書いてきた場面以外でも様々な局面で目の当たりにすることができたのは委員長として感動するほどであった。

敢えて、正直に言わせてもらおうと、僕自身 3 回生については、今まで一緒に活動してきたこともあったため、どのような動きをするのだろうかなど準備の段階も含めて心配することはなかった。ところが 1、2 回生に関しては、当然ながらやはり今まで共に過ごした時間が少ないこともありいろいろな場面において多々心配することがあった。しかし、今となってはこういった心配をしてしまっていたことを恥ずかしいとさえ思うようになった。

最後に、同じ学生という立場であるが、メンバーを委員長という立場で見た時、特に 1、2 回生であるが、もちろん僕も含めて 3 回生も、彼らが 1 日 1 日、一瞬一瞬、様々な場面が変わったな、成長しているなと実感できたのが何よりも収穫だったのではないだろうか。今となっては、本当にこの 14 人で活動できてよかったと思えるし、3 回生としても委員長としても集大成となった活動になったと自信を持って言える 8 日間であった。

とある視点から見たスリランカ訪問

政策科学部 3 回生 置村悠一郎

「やってよかった・・・」

2006 年夏のスリランカ・マータラ訪問の感想は、この一言に集約できる。そんなマータラ訪問ではあるが、準備から実施、報告までの作業を進めていく中で僕が大切にしたいと思ったことが 1 つある。それは「自分なりの視点をもつ」ということである。ここでは自分なりの視点から、マータラ訪問をとおして考えたことを書き連ねていきたい。

準備 - マネジメントの視点から

今回のマータラ訪問は、準備段階から不安なことが多かった。1 つ目はマータラの町や学校についての情報が少なかったことである。これは特に Research Project や Regional Rediscovery Project 実施するうえで大きな障害となった。また、前回の反省から企画を実施する日時や場所はなるべく学校のカリキュラムに影響を与えないように調整しようと考えていたが、前日の打ち合わせまでに十分な連絡をとることができなかった。

2 つ目は、共に活動するスタッフがあらゆる意味で未知数であったことである。正直、出発前まで不安であった。しかし、実際は、Passion を合言葉にスタッフ全員が団結し頑張った。夜遅くまで作業をすることになってしまい申し訳なかったが、体調を崩す人がいなかったのは素晴らしいことである。

子ども - 対象者の視点をもって

子どもたちを 3 班に分け、3 日間に渡り同じグループで活動するように設定したためか、スタッフと子どもたちの距離は、アルガムベイのときに比べ近かったように感じた。前回は 50 人全員に目を配る必要があったが、グループ分けすることにより、一人ひとりと向き合うことができたと思う。

さて、今回、6 年生を中心に 62 名の子供たちに対して企画を実施した。その子どもたちは僕たちの企画をどう受け止めたのだろうか？単に「一緒に遊んだ、楽しかった」だけでなく「世界に目を向ける、地域に愛着を持つ」といったことのきっかけとなったのだろうか？僕たちの活動は、スリランカの人に会いに行くことではない。今後も、対象者、つまり子どもたちの視点にたって、活動を発展させてゆく必要があると思う。

津波と復興 - 災害救援の視点から

2 月に訪れたアルガムベイでも、今回 8 月に訪れたマータラでも、津波の傷跡はあちこ

ちに見られた。マータラへ向かう途中、スリランカ西部から南部の海岸線沿いでも、打ち上げられた漁船、流された鉄橋、壊された住宅なども未だに残っていた。一方で、真新しい漁船、道路の舗装工事なども見る事ができた。

津波に限らずどの災害にも言えることではあるが、災害の後には緊急救援、復旧、そして復興の3段階がある。スリランカは復興の段階にあると考えられるが、復興は2年3年で済むものではない。長期的に復興そして発展というものを考えた上での活動が求められる点、ニーズの掘り起こしが難しいといった点など、いままで以上に地道な活動の積み重ねが必要とされている。

映像、写真、メモ - 記録の視点から

今回も90分テープ12本にも及ぶ映像を収める事ができた。その中には活動の様子をはじめ、僕たちが見てきたスリランカが記録されている。しかし肝心なのは、「何を伝えたいか？」である。映像は写真よりも多くの情報を含んでいるが、反面、何を撮っているのか、何を伝えたいのかが不明確になる。一方、写真は一瞬一瞬しか収めることはできないが、それだけに何を伝えたいのかがより明確となる。全員の撮った写真を集めてみると、それぞれが何に関心を持っていたかがわかって面白い。各々の個性が伝わって来るといえる。そして、より個性が出てくるのがメモである。今回、多くのスタッフがメモをとっていたが、それぞれの見たこと、考えたことなどを記録されているはずだ。

学生実行委員会は、被災地での支援活動と共に、国内での広報活動を活動の2本柱としている。この広報活動のために、写真や映像を使う機会も多いが、そのときは是非とも「何を伝えたいのか？」という点を重視して、選択なり加工をすべきであると思う。そして何より、自分たちが実際に訪れて見たこと、考えたことという視点と活かしていけたらと思う。

費用と時間、強みを活かす - NPOの視点から

何かやろうとすれば、お金も時間もかかる。それは今回のマータラ訪問にも言えることである。計算してみると学生実行委員会は、200万円を超える費用と、6月以降の4ヶ月間すべてをマータラ訪問のために注ぎ込んでいる。限られた費用と時間、スタッフをどう活かすのか？残念ながら僕たちが、全世界の、あらゆる問題を解決していくことは不可能である。だからこそ、自分たちの組織の強みを活かし、限られた地域、テーマの中で、活動の幅を広げ、質を高めてゆく必要があると強く感じた。

学生実行委員会は、ちょうどマータラ訪問の報告を終えたタイミングで世代交代を向かえる。この半年間、新たなメンバーが加わり活動の幅が広がった。そしてこのマータラ訪問をとおして活動の質も向上した。メンバーは入れ替わってゆくが、組織として継続的に活動していくことで強みが生まれてくる。自分たちにできることは限られているが、その中で全力を尽くしていきたい。

被災地を支えるもの

国際関係学部 3 回生 笹下加代

今回私はスリランカ小学校再建プロジェクト・学生実行委員会の一員としてスリランカ・マータラへ行ったのだが、ボランティア経験皆無、いわゆる発展途上国に行くのもはじめて、ましてや現地で子どもたちと交流するなんて、といった状態で、渡航前はもちろん、現地についてからもその日のスケジュール通りに動くことで、精一杯だったように思う。そんな中、自分のことから目を離すきっかけとなったのが、現地の人に行ったアンケート調査でのことだった。ある女性にアンケートへの協力を頼んだ時に、彼女が自ら、自分は津波で家族を失い、ついさっきまでそれに関する会議をしていたと話した。私はあまりに唐突なその発言に何を言うべきなのかさっぱりわからず、またそういった傷の部分に踏み込んでいいものか判断もつかず、結局、何も言えず受け流すという結果になってしまった。

後でそのことについて考えていた時、友人を思い出した。その友人は阪神大震災でお兄さんを亡くしたのだが、彼女はしばしば本当に何気なく自分には兄がいたのだということを出すのだ。そのことを思い出したのだ。彼女がそのことを口にする度、アンケート中に感じたような気持ちになるのだ。

私は、被災地の人々が亡くなった家族や友人のことを、自然に口に出せるまでに何が、どのくらい必要だったのだろうかと考えた。時間、遺品、人とのかかわり...それは、私の想像では及ばないことは確かだが、勇気かもしれないと思った。ただ口に出す勇気であり、忘れないための勇気であり、前に進むための勇気かもしれないと思った。そう考えると、私は調査で出会った女性に対して、失礼なことをしてしまったかもしれない。彼女の勇気に対して、私は応えるべきだったのかもしれない。しかし、なら、私は彼女にどう応えることができただろう。答えはまだでないが、自分なりの答えを見つける手がかりを見ることができた。

今まで、世界中から寄せられる支援によってインフラなどは元通りになったかに見えるが、被災者の心の傷は消えない。だから、世界中の人々が支援して、被災者の心の傷を治さねばならない、そうしないと、被災地は救われなかったらと思う。確かに支援も必要だが、被災地を救うのは、現地で出会った女性や私の友人のような、その傷を抱えたままどう生きていくかを主体的に考えようとする被災地の人々それ自体なのだ。そこで生活するのも、被災の前後を体現し、将来へつなげていくのは被災地の人々だからだ。だから、世界中で行われている様々な支援はあくまでも、そのための支援でなければならないのだと

感じた。

活動範囲も能力も限られている私たちには、できないことのほうが多い。しかしながら、今回のスリランカでの経験を、スリランカにだけ還元する以外にも、経験を転用すること、また、被災地を支える主体は被災地の人自身であることを誰かに向けて発信していくことは確実にできることだと確信した。

スリランカの子どもたちに出会って

文学部3回生 橋本雪

最初、代表の久保君に「一緒にスリランカに行かない？」と声を掛けられたのがきっかけでした。「スリランカってどこやっけ？確か紅茶が有名なところ。」とまったく知識の無いままに「何か新しいことに挑戦したい」という気持ちからこの団体に加わり、夏の訪問に参加することになりました。初めは、スリランカについて知るためにいろんな本やホームページをみることから始めました。そしてツナミの起きる仕組みや今回のツナミの被害状況などを調べ、みんなで勉強会をしたりしました。そうしているうちにだんだんとスリランカという国がわかってきて、私たちがやろうとしていることの大きさ、現地の子どもに与える影響力を感じ始めました。その上で、スリランカに行って自分たちに何ができるのか、何を伝えたいのかという事から、今回の小学校での企画につなげて話し合いを続けました。

途中、会議で意見が分かれて、なかなか決まらなかったり、決まってもまたふり出しにもどったりすることもたくさんありました。それに、最初は委員会のメンバー同士なかなか団結できず、ばらばらで本当に全員で企画できるのか、不安になった時期もありました。また、直前にスリランカの治安が不安定になり、行き先の変更があったり、出発日の前日まで本当にいけるかどうかわからないという不安な状態の中準備を進めなくてはなりませんでした。そんな中で、スリランカに実際行って、企画できたことが今回何よりうれしかったです。

現地では見るものすべてが初めてで、まったく日本とは違っていました。バナナややしの実がたくさんぶら下がった店やシンハラ文字で書かれた看板の立ち並ぶ町の様子は本当にテレビの中の世界でした。女の人がまとう民族衣装のサリーや男の人が腰に巻くスカートのようなサロンと呼ばれる服はいろんな色や種類があってとてもきれいでした。その町の様子や人々をバスか眺めながら、本当に来たんだな、と実感すると共に企画のことが心配になってとても緊張しました。企画責任者であったこともあって、初日から小学校に訪問するまで本当に心配でなりませんでした。

そしてとうとう本番の日の朝、小学校に行ってみると、そこには日本の旗とスリランカの旗を持った子ども達、そして先生方が私たちを迎えるために待っていてくれました。そんな歓迎を受けるとしてもいなかった私たちは本当にうれしくて感激したのを覚えています。しかし、その期待に答えなくてはというプレッシャーが大きくなって、とても緊張しました。そんな私たちを子ども達はきらきらした目で、必死につたない英語で話そうと声をかけてくれたり、一生懸命私たちの話を聞こうとしてくれました。私はあんなに輝

かしい笑顔を見たことがなかったというぐらい、素敵な笑顔をたくさんみることができました。毎日小学校へ行くたびに、名前を読んでもらったり、恥ずかしそうに照れながら声をかけてくれる子どもたちがいました。来る前にはまったく予想していなかったぐらい、最終日には、すっかり子どもたちと仲良くなって、別れがとてもつらくなるほどでした。

小学校訪問以外にも、ホテル周辺やビーチ、市内を回って人々にインタビューし、ツナミの調査も行いました。私はビーチの周辺を調査して、いまだたくさんの壊れた家が存在すること、そしてツナミで家族や友人をなくした人々が思った以上に多く、マータラでもかなり被害があったことがわかりました。小学校の子どもや現地の人々の明るい笑顔の裏には悲しい過去の傷跡があることを思い知らされました。

私は今回実行委員会のメンバーとしてこのプロジェクトに参加できたことそしてスリランカを訪問し、企画できたことを本当に良かったと思います。夏にみんなでたくさん会議したこと、一緒に準備したこと、つらかったことやしんどかったことも、みんなで乗り越えてきたからこそ、あの子どもたちの笑顔が見れたのだと思います。

これからは、もっとスリランカについてたくさんの人に知ってもらいたいです。そのために私たちがいろんな場で現地の様子やツナミの被害について報告し、私たちが感じたスリランカをたくさんの人に伝えていけるように活動していきたいです。そしてスリランカの人々がよりよい生活を送れるように支援を続けて行きたいと思います。

一瞬の3日間、スリランカ・マータラにて

国際関係学部 小島 武

今回のスリランカ訪問は、自分にとっても実行委員会にとっても大きな転機だと思った。というのは、今までは津波の被害がどうかどうやったら復興の手助けができるのかといったことを考慮にいられて活動してきたが、今回訪問したスリランカとくにマータラの現状を見る限りでは、津波の現実を振り返るよりも将来に目を向けて生きる人達の姿のほうが確実に多いと実感したからだ。それに自分自身も、津波の被災跡を沿岸地域でバスの中から垣間見たとき以外、その被災に関して想いをよせる機会は皆無に等しかった。津波は確かに一大事であったが、それからもう2年近くの時が経過した今では、僕たちが出来ることといったら被災による訪問をきっかけとして、その地域の人達や子供たちに僕らがどう関わっていけるかを考え、そして現地へ赴いていくことだろうと思う。その中でのやり方はたくさんある。僕ら日本人が彼らに影響を与える活動かもしれないし、もしかしたら逆に現地の人達から僕らが学ぶことかもしれない。今回の訪問は、日本の文化紹介・アイスブレーキング・クリーンプロジェクトに関して言えば日本のことを彼らに教えてあげるスタンスに立ち、逆に現地調査やリージョナルディスカバリープロジェクトについては彼らが僕らに与えてくれるものが多かった。これからの実行委員の活動が、今後マータラを継続するかもしれないし、スリランカの政情が安定すれば予定通りのアルガムベイに戻るかもしれない、もしかすると立命館学園の支援するインドネシアにも広がるかもしれないが、活動場所がどこになろうとも現地の人々の生活がまずあって、僕らがその上で何かさせてもらってるということのを頭のどこかに入れて企画立案してゆくべきだろう。そうすることで初めて、お互いに素晴らしい影響を与え合う存在が活動の中で見出されるに違いない。今回はその成果の第一弾として、この団体がほめるべき成功を収めたと自負している。ただ僕たちの現地での活動の成果が、目に見える形で残ったわけではないが、それぞれの現地の人達の記憶の中で熟成され、その体験が少しでも、今後彼らの生活の上でよい指針となってくれば、これに勝る喜びはない。

そして今後この団体がどういう目標をもってどのように活動しようとも、常に現地の人達と結びついて一人ひとりの意思が団体行動に反映されるような、有機的な組織であり続けてほしい。それこそが僕たち学生生活動のよいところでもあると考えるからだ。

学生生活動の特徴について(まとめ)

- ・常識にとらわれない全く新しい企画ができる
- ・どんな活動でも楽しんでやる力を持っている

- ・全員がじっくりゆっくりと話し合って企画をすすめられる
- ・活動は自己満足かもしれないけど将来（の仕事）への投資となる
- ・それぞれが自分だけの個性や能力を発揮できる
- ・活動資金のわりに効率が悪く結果が数値に出ないが、目に見えない成果（人の内面、ソフト面）を目標としたプロジェクトを実行できる。このことは逆に言えば、（目に見える形で）結果重視をする現代の企業やN G Oでは絶対にできないことである。
- ・・・etc

2006年夏スリランカ訪問での学び

産業社会学部 2 回生 間中 光

私にとって 2006 年 2 月に訪れて以来、二回目のスリランカ訪問であった。2 月の訪問で、私はこの島に生きる人々の素敵な笑顔に出会った。豊かな自然に心を癒された。また、この島が津波によって受けた悲しみを知った。そしてこの島の人々に何かいい刺激を与える活動がしたいと思った。今回の訪問で私は多くの仲間と共に、この島の人々にいい刺激を与えようと試みた。その試みを通して私は多くの事を学んだ。ここでそれらの一部ではあるが記し、その学びを次回の活動に活かしたい。

1、事後評価をうける

今回の活動においては、前回の反省を活かし、事前に各企画の説明を学校の先生方に行う時間を設けた。そのことにより私達が学校に到着するまでに、私達が要請したイス、机等を用意してくださるなど積極的に協力して下さった。しかし一方で、プロジェクト終了後、私達は挨拶等をする時間程度しか設けておらず、先生方から私達のプロジェクトに対する評価を戴く時間がなかった。私達のプロジェクトの全てでご尽力戴き、なおかつ子ども達のことを深く知っている先生方からの意見は大変貴重なものである。次回活動時は事前説明とともに事後評価を先生方から受ける時間をとることが望ましい。

2、身近なものを題材にする

今回のプロジェクトの中では日本の都市や習慣を題材としたものが多かった。しかし私達の活動はあくまできっかけ作り、「種をまく」ことだと考える。その種を「育てる」のはその国、地域で生きていく子供達である。よってプロジェクトの内容をより自分のこととして捉えてもらうことが望ましい。以上の観点から題材には子供達の周りにある身近なものを使用する必要があると考える。

私達は学生が中心となって活動する団体であり、まだまだ未熟な部分も多い。だからこそ常に反省を繰り返し、少しでも成長していかねばならない。今回の訪問の反省をメンバーで共有し次の活動にしっかり活かして生きたい。

未来を見据えて

政策科学部 2 回生 可知健太郎

「生きる力」これが私の今回のスリランカ訪問のテーマである。これには津波で被災した子どもたちに前向きになってもらいたいという願いと、自分自身が生きるということについて考え、今後の人生に役立てたいという二つの意味があった。そしてこのスリランカでの 8 日間の活動は私にとって予想をはるかに超える貴重な体験の連続だった。

私はもともと国際協力という分野にはそれほど興味を持っていなかった。実行委員会に入った理由は、津波で被災した地域をソフト面だけでなく、ハード面つまり将来的に経済的な支援につながるようにしたいという思いでこの活動に参加した。現地の人は何を必要としているのかを真剣に考え、Regional Rediscovery (地域再発見) という企画を創りあげた。今回は直前にプロジェクト地域がマータラに変わったことなどにより、事前の準備の時間が限られており、出発一週間前まで企画内容について話し合っていた。不安を抱えながらスリランカに乗り込んだが現地でのメンバー全員の頑張りにより、成功させることができた。特に小学校での活動は一日目のルフナ大学の学生との連携ができていなかったという反省を、二日目、三日目の企画に生かすことができた点が大きかったと思う。また企画責任者となり、皆の指揮をとって行く中で、組織運営というものに触れ、どうすればうまく話し合いが進むか、機能するかなど多くのことを考え、学ぶことができた。

スリランカの子どもたちははじけるような笑顔を持ち、本当に生き生きとした様子で 3 日間の活動を楽しんでくれた。これが私にとって何よりうれしく、時間をかけて頑張ったかいがあった。人々は明るく生き生きと生活しており、移動中のバスの中から手を振ると多くの人が笑顔で手を振りかえしてくれた。日本ではみんなが時間に追われ忙しそうに生活を送っているため、バスから見るスリランカのまちの光景は不思議だった。時間がゆっくりと流れるこの場所で、本当の幸せについて少し考えることができた。

しかし、その一方で海岸部周辺でヒアリング調査をすると、建物が潰れている家が目に付き、家族を失ったという人、金銭的・物質的な援助を本当に必要としている人を目の当たりにした。私がインタビューした人たちの顔からは津波で受けた被害や悲しさは十分に伝わってきたが、それを乗り越えてきているという印象を持った。

津波によって被害を受けた全ての人を助けることはできないが、今回の訪問で感じた、スリランカの魅力、人と自然の素晴らしさなどを少しでも多くの人に伝えることが今の私にできることである。そして今後は持ち帰った調査結果を元に、多くの人がスリランカという国を好きになり、訪れてくれるように、産学連携をもとにした情報発信を行なっていきたいと考えている。最後にこのプロジェクトを支えてくださった多くの方々への感謝を忘れず、私自身も夢に向かって様々なことに挑戦していきたい。

全力少年

政策科学部 2 回生 田村将人

今回のスリランカ訪問は、自分を大きく変えた旅になった。この旅以前は、国際問題やボランティアにほとんど興味はなかった。興味のあったことといえば、観光業やまちづくりや都市問題で、海外で自分が活動するとは考えても無かった。海外ボランティアに対して、普通の大学生が初めて行く国や地域でいったい何ができるのだろうか。結局、迷惑かけて帰ってくるだけなのではないだろうか。そういう思いもあった。ただ、行くのであれば、地域の経済発展に少しでも何かしたい。少しぐらいなら力になれるのではないか。そう考え訪問前準備段階から活動していた。

自分が調査企画を責任者となっていたことから、調査が一番今回の旅で自分自身を変えたのではないかと思う。はじめこの企画は、自分が他に所属する団体で考えられたものであり、まだ自分が委員会にあまり溶け込んでなかったことや、調査企画だけ他の企画と違い小学校や子どもに直接関係が無かったことで、企画自体取り組んでもらえるのか、うまく協力してもらえるのかとても不安であった。また、この企画は進行が遅くたくさん迷惑をかけ、準備段階で不完全になってしまったことが多々あった。本当に反省したい。

DAY 1 の調査 1 回目当日、スリランカに着いて休み無く活動していたことと、1 日目午前の小学校の企画を終えたことで、自分自身も委員会メンバーも疲れきっていた。それらのこともあり調査活動時間の短縮を余儀なくされ、とても悔しい思いをした。また、ルフナ大学の学生との連携が不十分だったことや想定外なことが多すぎ、自分の班はほとんど結果を得られなく企画責任者としての不甲斐無さを感じた。DAY3 調査 2 回目も、1 回目の失敗もあり不安で仕方なかった。その上、自分自身も市長と会えることになりまったく余裕がなかった。しかし、調査から帰ってきたメンバーに話や感想を聞くと、みんなそれぞれが考え積極的に行動してくれていた。メンバーから企画に対して否定的な意見しかないと思っていたが、「やってよかった」「もっといろいろ聞きたかった」などの感想を聞き企画してよかったと初めてホッとした。だが、自分の指示の不足での目的の共有が取れてなく、あまりいい結果を持って帰ることができず残念で仕方がない。旅を終えて海外での活動の難しさ、責任者として動く難しさ、企画内容の甘さを思い知った。今度は、もっといい企画を練ってリベンジしたい。

坂田さん、藤山先生、小林さん、ラタナさん、ラマニさん、カピラさん、チンタ先生、ルフナ大学の学生、委員会のメンバーをはじめたくさんの人から本当に助けてもらった。ほんとに感謝したい気持ちでいっぱいになった。英語力の無さ、判断力の無さ、ひとりでは何一つできないこと、自分の力の無さを痛いほど実感した。今回の様々な経験で、自分の視野が広がったし、今後学んでいきたいこと、将来やっていきたいことが遠くの方まで道が見えてきた。

僕たち学生はたくさんの方を学ばせてもらい、そしてたくさんの方々に世話になった。でも、スリランカに、マータラに、子ども達に目に見えるような結果を出すことはできなかった。それでも僕たち学生の活動が無意味だとは思わなかった。とても身近な社会や、とても狭い範囲でも、何人かの子どもや学生でも、少しでも変えることができるのであれば、活動を続けていく意義はあるのではないかと思う。また、僕たちだからできることを探したい。これから少しずつでもお世話になり成長させてくれた人や地域に何らかの形で貢献していきたい。

僕は、この旅を終えてスリランカという国がとても好きになった。それと同時にこの委員会がとても好きになった。これからも委員会の活動を通してもっと成長していきたいと強く思う。迷惑ばかりかけていたが、本当にスリランカ訪問に参加してよかった。ありがとうございました。

直接向き合い気づいたこと

経済学部 2 回生 植田雄紀

春に学生実行委員会に入会して半年余り、この夏季休暇にようやくスリランカ現地訪問に行く事が出来た。

今回の現地訪問における個人的な目標の一つにスリランカの空気触れて、今まで人づてに見聞きしてきた漠然と描いていたスリランカのいう国の輪郭をはっきりとさせたいという事があった。結果を言うと初めて触れる多くのものに困惑し、萎縮してしまって目標を完遂できたとはいえなかったが、どうにか及第点くらいの経験は積めたと思う。特に小学校での交流活動とマータラ市内でのヒアリング調査を通して多くのものが得られた。

実際にその姿を見るまで、何度も子どもたちは前向きに生きている、と聞いてもやはりインド洋大津波で被害を受けたであろう彼らに対して暗いイメージを抱かずにはいられなかった。津波で大切なものを失って心に傷を受けた子どもたちを励ませればいいと交流企画を行なう前は思っていた。しかし今振り返ってみると、子どもたちを励まして彼らの心に残るものを与えたというよりも、自分たちが子どもたちから心に残るものをもらったのではないかという気持ちの方が強い。企画初日から子どもたちは笑顔で自分たちを出迎えてくれ、好奇心旺盛に、積極的にひとつひとつの企画に取り組んでくれ、最終日までずっと笑い続けてくれた。企画を実施する前、心のどこかで子どもたちに対して励ましてやろう、心に残る何かを与えてやろうという上からの意識を持っていた自分の思い違いを彼らは気付かせてくれた。上から与えるどころか、逆に多くのものを自分は彼らからもらい、子どもたちと直接向かい合っようやくずっと抱いていたイメージを払拭できた。

実地調査に直接参加できたことも自分の意識に変化をもたらした。2月の訪問で行なわれた調査結果の整理の手伝いを通して、スリランカの人々が抱えている問題や望んでいるものを少し知る事ができたが、その時はスリランカや津波被害に関する知識が不足していた事や、直接現地人の生の声を聞いた訳ではないので、正直それほど深く問題を捉えられなかった。例えば多くの子どもが先生になりたいという夢を持っている事も、そうなのかと思う以上の感想を持てなかった。今回の調査を通して感じた事は、自分の想像以上に現地の大人は経済発展を望んでいるということだった。Income や economic という単語は多くの回答者から聞かれた。外国人がマータラにやってくる歓迎する事の理由の多くは企業の誘致や収益の増加につながればよいというものだった。今までそう言った意見を直接聞いた経験はなく、大きな衝撃を自分は受けた。大学で1年半、スリランカをはじめ途上国の経済についていくらか学んできたが、実際に話を聞いて現実教科書からでは感じられないくらい強い発展への願いがあると感じた。

今回の渡航で現地の人々の声を聞き、多くのものに触れる事が出来て、スリランカと言う国の輪郭は結ぶ事が出来た。今回得たものを材料にして、今後現地の人々の為に自分たちは何が出来るのかをもっと真剣に考えていきたい。

「Go on a journey to Sri Lanka.」

政策科学部 2 回生 服部和希

1. スリランカに行って思うこと。

「The airplane will soon be arriving at Colombo Sri Lanka」

連日のスリランカの情勢悪化の news を聞くたび、本当に大丈夫なのだろうかという不安でいっぱいだった。特に、飛行機の窓から最初にコロンボ空港を見た時は「いよいよか」という印象だった。これからどんな事が起こるのだろうか・・・。

スリランカに到着して、熱帯地方独特の湿度の高さにうろたえつつも、バスに乗り込みホテルへ移動。いかにも途上国らしいホテルだったが、私にとっては申し分のないほど豪華に感じた。吸い込まれそうなくらい綺麗な星空に旅の安全を祈り、眠りにつく。

次の日にマータラへ移動し、ルフナ大学の学生に出会い、今後の小学校での活動の内容を確認。そして、いよいよ本番へ。

小学校での企画はすべて満足のいく結果だった。現地の子どもたちはメンバーをすぐに受け入れてくれた。被災地の子どもたちとは思えないくらい、素晴らしい笑顔で接してくれて、私も子どもたちと一緒に本当に有意義な時間を過ごすことができた。「KAZUKI！ KAZUKI！」と呼ぶ姿は今も目に焼きついている。

午後の調査企画に関しては多くの反省点が残った。事前の準備が不十分であったため、当日困惑する場面が多く見られた。今後はこの反省を生かし、素晴らしい成果をだしていきたい。

スリランカ渡航で、様々な事を考えさせられた。まずは「素晴らしすぎた子どもたちの笑顔」である。津波が発生して2年もの月日が経って、子どもたちに笑顔が戻りつつあるのには本当に幸せだった。しかし、その子どもたちの中にはきっと家族を亡くした子どももいるだろう。あの子どもたちは何を思っているのか。それを考えた時、私は本当に悲しくなった。笑顔が素敵すぎて、逆に悲しかった。しかし、子どもたちの逞しさに本当に勇気もらった。笑顔を届けるはずが、なにか、笑顔を届けられた気分になった。

また、ある女性に調査のお願いをした時の会話の中で、「私は津波で姉妹とおじを失った」と言われた時、私は本当に言葉に詰まった。何も言えなかった。本当なら津波の事を色々聞きたいのだが、その女性の心の中にできた傷を思うと、恐怖心が先行し、何も聞けなかった。本当に一瞬の出来事だったが、とても印象に残った。

しかし、私たちは一体何なのだろう。突然外国人がやってきて、子どもたちに授業をし、津波で家族を失った女性に対しインタビューを行う。スリランカの人々は何を思うのだろうか。

その結論は、おそらく分からないであろう。むしろ分からないほうが、私にとっては好都合だ。なぜなら、それをずっと考えていたい。また、悩んでいるうちはずっとこの経験

を覚えているだろう。そして、もし可能であるならば、私の行った活動は子どもたちに何かしらのインパクトをあたえてほしい。子どもたちの将来の為のきっかけになってほしい、と願いたい。

今回の活動を終えて思うことは、災害復興支援団体である私たちが、今後どのような活動をしていかなければならないのか、という事だ。現地での活動は、小学生だけに留まらず、防災教育等も含めた活動を行っていかなければならない。このような被害を二度と出さないためにも。そして、時代に流されつつあるインド洋大津波というものを本当に多くの人に知ってもらう必要もある。スリランカに対しての長期的な支援も大切であるが、スマトラ沖地震で被害にあった他地域での活動も重要になってくるのではないかな。

また、今回の渡航の意味が、いったいどのようであったのかを皆に考え続けてほしい。なぜスリランカに行くのか。なぜ、被災地を支援するのか。

2. 感謝の言葉

今回の渡航は改めて本当に多くの方に支えられて実現できたものだと思います。国際課の方々、坂田さんを始め、本当に多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。今後も災害復興支援団体として、期待に応えられるような活動を行っていきたいと思います。

また、素晴らしい思いを共有できたメンバーの皆さん、本当にありがとうございました。私たちに課せられた責任は大きなものですが、自信を持って頑張りましょう。

「人生は実践です。戦いです。前進です。二度とない青春時代です。だからこそ自分が生きた証として、何かを残してください。何かを作り出してください。」

スリランカを訪ねて3千里

政策科学部1回生 秋本翔太

私たちが訪問したマータラ市の小学校の子供たちは皆笑顔が絶えない無邪気な子ばかりだった。その“笑顔”は、とてもテロや内戦といった昨今のスリランカのイメージとは全く正反対のもので、平和な日本の小学生でもなかなか見せないようなとびきりの笑顔だった。ところで今回のわれわれ学生実行委員会のスリランカ訪問の目的は、現地の子供たちが未来に向かって希望を持つという趣旨のものだった。しかし、3日間の活動を通し子供たちの様子を見て私は「この目標は自分たちが来る前から達成されていたのではないか」と思うほどであった。子供たちの Passion は、私にそう思わせるほど凄まじいものだった。何はともあれ、子供たちとも仲良くなり3日間の企画はとりあえず成功だったといえるだろう。私がグループリーダーを担当したグループではみんなが「Shota!」「Shota!」と私のことを呼んで静かにさせるのに苦労したほどであった。最後には私の連絡先を教えてくださいと集まってきたり、しおりのプレゼントをもらったりと自分で言うのも変だが結構な人気は獲得できたのではないかと思う(笑)今回の訪問が彼らの将来に少しでも影響を持ってくれればと思う今日この頃である。

子供たちとの企画の他にも企画を行った。マータラの観光業に関する調査企画である。この企画では班に分かれて店のオーナーなどの現地住民に調査をした。その際には現地のルフナ大学の学生に通訳をしてもらうなど協力してもらった。そして幸運にも私は、マータラ市長へのインタビューをする機会に恵まれた。突然決まったことだったので質問内容を徹夜で練るのも焦ったが、1回生のうちから公的機関での調査ができるというのは私にとってかなり良い経験になったと思う。実際マータラ市長は今後の観光、主にまちづくりに関するプランについて多く語ってくれたので相当内容の濃い調査ができたと思うし、今回の調査をきっかけにこれからもマータラ市とのつながりを持てるといいと思う。政策科学部の人間としては、観光業に関して何らかのアプローチができればとも目論んでいる。個人的には、今回の調査で得ることができたスキルや失敗を次からの調査に生かしていきたい。

今回のスリランカ訪問の反省点はあまりないと感じているが、強いて言うなら全体的に準備不足だったかもしれないと思う。今回は事前に十分に話し合う機会も多くはなく、現地の情報も限られてはいたが、現地で準備しなければならないことも多かったように思う。そのせいでメンバーが予想以上に疲れてしまったように感じられた。限られた準備期間でもっと効率よく準備ができれば、余裕を持って現地で企画が実施できると私は思う。次回からはその点も考慮に入れていきたい。

企画以外に、スリランカを訪問して気が付いたことがいくつかある。まず1つ目に、スリランカの人はかなり日本のことについてよく知っている、ということだ。日本車が多い

のを筆頭に、日本の ODA で行われている事業や歴史に至るまで、日本人は気づいていないがスリランカという国はとて日本に近い国であったということに私は驚いた。2 つ目に、やはりスリランカでも貧困が問題であるということだった。確かに他のアジア諸国に比べれば教育水準も高いし、社会インフラもそれなりに整ってはいたが、一步町に出ると物乞いの数は半端ではない。当たり前だが日本のホームレスとは全く違う。小さい子供までもが「ペンをくれ、ペンをくれ」と言ってくる。ペンが買えないほど貧困なのは謎だが、一般的なスリランカ人の平均月収は約 10,000 ルピー(日本円にして約 10,000 円)だそうだし、見た感じ皆裕福な生活を送っているとはとても思えなかった。この点についても、もっと考える必要があるなと私は感じた。と同時に、いかに私が今まで贅沢な暮らしをしてきたかということの思い知り、恥ずかしさと感謝の気持ちが起こった。

そのようなことも踏まえた上で、私は今回の訪問を終えて今後の実行委員会のありかたについて考えてみた。今回行ってみて感じたことは、災害から 2 年、いつまでも津波にこだわっている必要があるのか、ということだった。正直現地の人々が津波による被害で今も何かを求めているとは感じられなかった。こんなことを言うと残酷かもしれないし、一方的で見捨てているように感じられるかもしれない。しかし、私にはもっと根底にある“貧困”という問題があるような気がした。これは私が個人的に考えていることなので、委員会で他のメンバーと議論をする必要があると思うが、委員会のこれからを見直すにはちょうどいい時期ではないかと私は考えている。

最後に、今回の訪問にあたってお世話になった荷車の会代表坂田さんをはじめとして、ラタナさん、ラマニさん夫妻、小学校の先生方、子供たち、ルフナ大学の学生たち、出発前から見守って下さった藤山先生、小林さん、そして私たち低回生を引っ張ってくれた委員会の先輩方、共に頑張った同回生のみなさんに、こんなに貴重な体験をくれたことの感謝の意を表し、これからも頑張っていくことを誓いたいと思う。みなさん、本当にありがとう。

2006年夏 見えてきたもの

文学部1回生 岩淵宏美

人と出会うことで、自分が変わっていくのがはっきりわかるというのは、生まれてはじめての経験だった。スリランカで過ごした1週間は、その「はじめての経験」の連続だった。子どもたち、街の人々、ルフナの学生たち、坂田さん、そして現地で活動をサポートして下さった多くの人たち。スリランカでのすべての出会いが、今確実に自分の中に生きているのを、はっきりと感じる。書ききれないほど、たくさんのことを教えてもらった。その中でも1番心に残ったのは、子どもたちが感じさせてくれた、「教えることの楽しさ」だった。私にとって一生忘れられない出来事が、小学校での活動の最後の日に起きた。

DAY3に行った Kids Activity という企画の中で、日本の文化紹介としてお箸、筆ペン、折り紙を子どもたちに体験してもらった。チームごとに分かれて、それぞれ3つを順番に体験していくというものだった。その出来事は、私の黄色チームが筆ペンを体験していたときに起きた。チームのリーダーは、みんなに書いてもらう言葉を決めて、それを実際に半紙に書いて見せるという役目があったので、リーダーであった私は、最初に書く言葉を「日本」に決め、みんなの前で書いて見せた。子どもたちは私が書いた見本を見ながら、真剣な顔で筆を動かし、「日本」と書いていく。思った以上にみんな上手だった。書き終わった子に、「very good!!」と声をかけながら回り、全員が書けたなと思ったときに、私はせっかくだから、半紙に名前も書こうとみんなに提案した。すると、Hashan という男の子が真っ先に名前を書き始めた。そして、満面の笑みで私に書き終わった半紙を見せた。そこには、大きく「ハシャン」とカタカナで書かれた彼の名前があった。当然子どもたちは英語で名前を書くだらうと思っていた私は、一瞬びっくりして声が出なかった。やっと口から出た言葉は、泣きそうになるのを必死で我慢して言った、「Thank you」だった。その日の2日前、DAY1の休憩時間でのこと、黄色チームの一人の女の子がサインをもらおうとメモ帳を抱えて私のところへやってきた。名前と住所とサインを書き終わったとき、ふと彼女のネームカードが目に入ったので、彼女の名前をカタカナで、英語で書かれた名前の下に書いてあげた。日本語教師になるという夢を持つ身として、少しでも身近な部分で日本の言葉に触れてほしいという思いから出た行動だった。あなたの名前を日本の文字で書いたらこうなるんだよと説明してあげると、彼女はすこしはずかしそうに笑って、カタカナで書かれた自分の名前を指でなぞっていた。思いつきで行ったその行動が、瞬く間にチームの子どもたちに広まり、その日のうちにほとんどの子どものネームカードには、カタカナで書かれた彼らの名前が付け足されていた。このことが、3日目の企画で思わぬ形となって現れた。Hashan に続いて、次から次へとみんながカタカナで自分たちの名前を半紙

に書いていく。驚いたのは、彼らのほとんどがネームカードに書いてある手本を見なくても、カタカナで名前が書けるようになっていたことだった。カタカナで書いた名前を、一斉に私に見せてくれたときの彼らの笑顔を、私は一生忘れないと思う。日本語教師になるという夢を持って大学に入ったものの、多くの現実や自分の無力さを目の当たりにして、夢をかなえる自信を失いかけていた私に、「日本語で世界の人とつながる」という思いを、彼らはもう1度思い出させてくれた。今でも、あのときの感動と子どもたちの笑顔は何よりも鮮明に思い出すことができる。

子どもが好き。もっともっと広い世界を自分の目で見たい。そして、世間のニュースからだんだんと消えつつあるインド洋大津波の、被害の「今」が知りたい。これらの思いから私は実行委員のメンバーとなったが、国際協力に関する知識はまったくのゼロだった。実際にスリランカを訪れ、活動し、帰ってきた今、自分がスリランカで行ってきたことを考えたとき、果たしてそれが「協力」と言えるものだったのかはわからない。単なる自己満足に過ぎないのではないかという思いは、行く前もそして今も、正直なところずっと心の隅っこにある。私は、医療技術を持っているわけでも、建築技術を持っているわけでもない。マータラで出会った、「この街はもう元通りになることはない」と言っていたおじいさんの悲しみも、家族や友達を失った人の痛みも、私が拭い去ることはできない。小学校の企画で私たちが行ったことが、子どもたちにとってどれくらい意味のあることだったのかも、わからない。私一人にできることは、とてつもなく小さいことに気づかされた。国際協力という分野で自分には何かできるはずだという淡い期待が、自分の中で覆された。被災地にいる人々や世界中で助けを求めている人々に、私ができることは何なのか、今もずっと困惑の中にある。でも、たくさんの人の助けを借りながら、14人の人間が手を取り合えば、あれだけの子どもたちの笑顔を見ることができる。あれだけの出会いを生むことができる。私たちが彼らに出会うことは、決して「協力」ではない。でも、出会ってこそ思いが生まれて、そして「協力」につながると私は思う。たくさんの人との出会いを通じて、復興から次のステップへ進もうとしている被災地を、後押しできるような「協力」への道を探ること。今の私にできることは、それだけだと思った。

笑顔がつながる。そのことのうれしさを、スリランカの人々は教えてくれた。それがバスに乗って過ぎ去る私と、道に座っている男の人が交わした一瞬であっても、すごく大切な瞬間に思えた。これからどんな国に行っても、どんな人に出会っても、この思いはずっと忘れずにいたいと思う。

最後に、今回の夏期スリランカ訪問にあたって、私たちに関わってくださったすべての人たちに心から感謝したい。本当にありがとうございました。

こどもたちへ、スリランカへ。

こどもたちから、スリランカから

産業社会学部 1 回生 柳生由布子

《その海は素直だった》

8月28日。夜。浜辺 In スリランカ。もったりした空気が鋭く舞う。波は穏やかではない。さらさら想像していたスリランカの浜辺ではない。黒く渦巻いた波。決意の甘い・意志の弱い不安でいっぱい私を見抜いて、「馬鹿にするな」とでもいっているかのようだった。それは、スリランカに対してなのか・TSUNAMIに対してなのか・この活動に対してなのかわからなかったが。

《こどもたちからのおくりもの》

そういえば私は、こどもたちに何かを与えたいという心持でスリランカへと旅立った。それは鉛筆であり、外国人訪問という新鮮さであり、笑顔であり、愛のあるコミュニケーションであり、さまざまであった。帰国して自分に何ができたのか振り返ってみると、虚しくなるくらい何も無い気がした。滞在中に、その土地から、その土地の人々から多くのことを学んだが、全て教わったばかりで私には何が…。こどもたちの中に、何か残せたかな。何かのきっかけになれたかな…。それは本人たちでないと私にはわからない。不安。ただ唯一達成できたことといえば、行く前にたてた目標その、「人と人、笑顔と笑顔のふれあいを大切にする。愛をもって。」である。これも、こどもたちのおかげであるが。彼らは、こっちが愛情を持って接すると、愛情でかえしてくれた。その素朴な愛のコミュニケーションが、なんとも心地よく幸せだった。彼らはまっすぐに私をみて、「yuko」と読んだ。私は司会者を気にしつつ小声で言った。「what?」彼らは恥ずかしそうに首をかしげ、囁いた。「come.yuko」

彼らはそのままの愛をもって私に接してくれた。これは誰にもあげたくない私だけのたからもの、彼らからのおくりものである。

《わたしは、どっちのスリランカにいったのか》

被災地としてのスリランカ。滞在中、その意識がどうしても頭から離れなかった。というのは嘘である。確かに、渡航前や渡航直後は、そのことばかり考えていた。初日のホテル。スリランカ特有のお香のにおいが漂う。その夜… “災害に何の関係も無い、ましてやお金をくれるNGO団体でもない rich な日本人が何しにきたんだ。冷やかしか。”と軽蔑されたらどうしよう、とか、どういう態度で接したらいいんだろう、とか、もう考え出したら收拾のつかないことばかりが頭の中をぐるぐるぐるぐる。HOTELで会った現地の人、次の日(29日)の事前打ち合わせで会った先生方と現地の学生。少し話してもその

笑顔の裏では何を考えているんだろう...ぐるぐるぐるぐる。しかし、現地の学生と夕食へ向かう時のバスの中、太鼓を片手に歌う Manodya。何歳なの？などの会話をした Dilini。含め 10 人。優しげな瞳。心地よい British English。彼らは陽気で、とてもあったかかった。なんだか気が楽になった。

そして 30 日。Matara の町は、やはりスリランカ特有の香りがする。こどもたちとご対面。最初は緊張したが、上にも述べたように彼らとのコミュニケーションをはかるうちに、そのぐるぐるはふわふわと解けてひらひらとどこかへいってしまいそうだった。この町に、本当に T S U N A M I は起きたのか。確かに起きた。不自然な段差、傾いたヤシの木、あったはずの家、ただそこに敷地。ふとしたときに T S U N A M I の被災地だということを実感させられる。けど、年齢性別問わず現地の人との交流中は、忘れそうになる、その事実。それはどうしてなのか。

なぜならこの国は、笑顔や愛に溢れていて、それらはどこかねっとりとしていて少し媚びるような、でもそれが純粋なそのままの愛であるような、不思議な感じ... (この地域の気候に似ている...?) であり、ただそれが、無性に心地よくてならなかったからである。けれど現実に引き戻って考えてみると、自分が何のために来たのか、ただ子どもたちと交流をしにきたんじゃない、と焦り、ひらひらどこかへいきそうなものを必死に手繰り寄せるように考えた。「私は“スリランカ”という国に来たのか、それとも“被災地としての”スリランカに来たのか。」滞在中に答えは出せなかった。けれど、帰国して振り返って思ったこと。T S U N A M I がおきてから 1 年 8 カ月という月日が経っていることもあるが、Matara を被災地として、考えることは、ひょっとして失礼なことだったのではないかな。私が受けた印象。彼らは、世界にひとつしかない“スリランカ”という国を誇りに思っていた。その国は、内戦も災害も吹き飛ばすような、根っこからの愛情に溢れていた。

《彼らの気持ち》

Research Project (国内の会議も含む) を通じて感じたこと。それは、matara は、地域としては、ほぼ復興を遂げて、もう次の段階へ向かうことしているようであるということ。それを感じた主な理由は町としてもう十分機能してことと、何よりの決定打は(これは私の先輩が体験したことであるが) T S U N A M I によって自分の家族が死んだことを私たち日本人に話してくれた (O U T P U T できる状態である) ということである。O U T P U T できるイコール彼らの中で何らかの気持ちの整理がついていると感じるのだ。

私は、(きっかけがつかめなかったのもあるが) なんだか怖くて、Research Project で尋ねた現地の人にも現地の学生にも T S U N A M I が起きた時のことについて全くといっていいほど聞けなかった。彼らの気持ちは分からないけれど、気を使って聞かないよりも、むしろ聞いたほうが良かったのかな、とも思う。なぜならば、自問自答してみると、“気を使う = 哀れみの感情がある” ことがわかったからだ。彼らは前向きな一歩を踏み出そうとしているのに、外から来たものがまだ過去に囚われているのは失礼なことではないかと思

ったからだ。もしも次の活動が、また Matara ならば、被災地としてではなく、発展していく地として支援すべきなんのではないかと感じた。

《WE PROTECT OUR COUNTRY》

DAY 3 の最後に、子供たちにスリランカを紹介するポスターを作成してもらった時、ある子が大きくクレヨンで書いてくれた言葉。行く前にたてた目標その、「こどもたちに、自分たちスリランカの未来をつくるんだ！と感じて欲しい。」その目標は、たてるまでもなかった。この文字を見たとき、(政治的な強制的なものではない)彼らの“純粋な愛国心”を感じとても感動した。なんだか使命感すら感じた。

《生きる力》

これから私たちは、Matara のその再興・発展への後押しと言う活動もできる。が、私としては、まだテントを張ったままの生活をしているこどもたちがいるのなら、津波が起き、家が親類や友人を亡くして、なんでよりによって自分らの国にこんなことが...なんて思っているこどもたちがいるのなら、真っ先にそこに駆けつけたいと思う。そして、その地域にあった活動を展開していきたい。継続的な支援も大切だと思うが、マータラ・スリランカにこだわらず何か前向きな“生きる力”を欲している地域へいきたい。私たちによって、笑顔とともにそれを伝えられたらな、と考えている。(“生きる力” by 可知さん)このような気持ちになれたのも、今回の“学生実行委員会”としての“スリランカ訪問”という素晴らしい機会のおかげだ。

《いつか》

こうして私たちが、様々なことを肌で感じ、それぞれの何かのきっかけになる体験をさせていただくことができたのも、立命館大学をはじめ、様々な手厚いご協力・ご指導をしてくださった藤山先生、小林さん、坂田さん(NGO 荷車の会)、現地のラタナさん、小学校の先生方、通訳してくれた現地の学生(ルフナ大学)などなど、数え切れないほど多くの方々のおかげです。本当に、本当に心から感謝しています。

この感謝の気持ちをどうやって伝えるのか、どのように恩返ししたらよいか、まだわかりませんが、いつか、「この学生実行委員会に(この学生に)、このような機会を与え、様々な援助をしてよかったな。」とだけ思っていたような活動を今後していけたらな、と、思い、期待に胸を膨らませています。

《またあの海に出会えるなら》

スリランカ初日にみたあの海にもう一度出会えるなら、そのとき私は、胸を張っていられると思う。あの時の、自分の決意の甘さ・意志の弱さに不安でいっぱいなのはもうない。帰国して、さらに明確になった意志。

“伝えたい、私が見て聞いて感じてきたことのすべてを、できるだけ多くの人たちに。”

訪問を終えて・・・

経済学部 1 回生 中木寛敏

マータラに行くにあたって、やはり初めての場所に行くので当然さまざまな不安はあったが、楽しみにしていた部分も多かった。実行委員会に入ってまだ日が浅かったのもあり漠然とではあったが行くからには自分としては各企画を楽しみ、後から振り返って「やっぱりやって良かったな」と思えるものにしたいたいというのと、1つでも多くのものを得て帰りたいということを思っていた。

アイスブレイキング

マータラの小学生は笑顔のたえない明るい子どもたちで、最初こそ少し緊張した様子ではあったものの、企画が始まるとすぐに日本の遊びに興味をも持ちはじめ、楽しんでくれた。いろんなことに対して興味を示してくれるのは日本の小学生もスリランカの小学生もやっぱり同じなんだなと思い僕自身も子どもたちと打ち解けた感じがあったのでうれしかったし、少しほっとした。企画自体も時間配分は少しくるったところはあったが、それ以外はうまくいったと思う。

Regional Rediscovery

小学生を外に連れて行っての企画だったので前日は移動の際の各グループのメンバー配置などさまざまなことをミーティングで話し合った。それが良かったのか子どもたちがケガをしたりすることなく無事終わることができた。企画の目的は子どもたちに自分たちが住んでいる地域の良さを再認識してもらおうというものだったが、子どもたちは地元のここが良いということを知っていたし言うことができていると思うので今後その自分たちの地域の良いところを忘れずに、生かして行ってほしいと思う。

Kids Activity

これが小学校での最後の企画だった。日本の文化を紹介したりするものだったが子どもたちは僕が予想していた以上に飲み込みがよく、箸の使い方を教えて消しゴムをつかむように言うとなぜかすぐにつかむことができる子がいたりして驚かされた。しかし中には時間内につかむことができなかつた子も何人かいたので、そういった面では残念だった。またスリランカの子達は絵が非常に上手で、立命館小学校へ贈るポスターを書いてもらったときも限られたペンの中で色鮮やかな絵を書いてくれて、文化が違うと絵の描き方も違ってくるのだなぁと実感した。

Clean Project

DAY1 から DAY3 にわたっての唯一の企画であった。企画段階では学校の校舎がどんな感じなのかがあまり分からず、行くまではイメージがしにくかった部分もあり、掃除の仕方を教えるのに少し苦労したところはあった。しかし実際スリランカに行ってゴミはさまざまなところで目に付いたし、ビニールなどの自然に返らないゴミはいずれ問題になる

ことも考えられるので僕はこの企画は継続していてもいいのではないかと思っている。全体を通して感じたことは、実際に行ってみないと分からないことが多いということだった。企画などでは内容や全体の流れは事前のミーティングである程度の想定はできるが、時間配分などは必ずしも予定通りにいくとはかぎらない。またスリランカに行くのが初めてだった僕にとっては環境や気候も行くまではほとんど想像がつかなかった。また現地に行って自分自身変わったと思うことは、1 つは自分が現地に行って、人と接し、活動して感じたことや現地の様子を他の人に知ってもらいたいと思うようになったことである。現地の人々が津波の被害を受けたことは多くの人が知っていることだが、被災者の様子などは実際に行ってみないと分からない。そういった部分を僕たちは伝えていくべきではないのかと思う。もう 1 つはもっと色々な国の現状を見たいと思うようになったということである。インド洋津波ひとつにとっても被災地は今回行った場所だけではないし、もっと被災状況のひどい国や支援の行き届いてない地域もあるので、そんな国や地域を見たいという気持ちが マータラに行ってより強くなった。僕たちの活動すべてが現地の人々に影響を与えたり、プラスになっているかどうかは分からないが、それでも現地の人にとって何が必要か、また何を必要としているのかについて考えることはすごく重要なことだと思うし、それが今後のより良い活動につながっていくと思う。

13. 現地同行者のコメント

津波被害の復興はどこまで進んだのか

1年8ヶ月たったスリランカの現状

「荷車の会」代表 坂田繁数

2004年12月26日の津波の被害を聞いて、18日後の1月13日支援と調査のためにスリランカに入った。この時点では、仮設の橋をかける工事やテント村の設営など外国の軍隊などの活動が目立っていた。

南部地域の被災小学校などを訪問したが、泥で埋まり瓦礫となっている学校は、跡片付けさえも手が付けられていなかった。生き残った人々は、呆然と立ちすくみ日々をどう生きていくかということで、精一杯という感じであった。被災者への水と食料の配給のために、国を挙げての取り組みがなされていた。

それから、1年8ヶ月、今年8月立命館大学の学生たちの南部マータラ市の小学校での活動に同行した。またその後、立命館が支援して運動場と講堂を建設している東海岸のアルガムベイまで足を運んだ。

幹線道路は、津波以前より立派な舗装がなされているところもあるが、一般道は、まだ穴だらけの状態、特にアルガムベイの道路は、土煙が舞い上がっていた。津波で流された橋は仮設の橋がかけられていたが、現在本工事が日本を含む外国の支援で行われていた。

青空テント教室の学校は、ほとんどなくなっているものの、仮設教室での学校は未だに目に付く。アルガムベイの小学校では、青空テント教室から新しく建設された校舎の教室で子どもたちが勉強していた。津波被害者に対して、当初1世帯5千ルピーが支給されていたが、6ヶ月で打ち切られたという声も聞いた。また、アルガムベイでは、船を失った漁業関係者に対して、新しい船が供給され、海岸には真新しい船が並んでいた。

ただ、こうした状況を見るときいっつか考えさせられることがある。スリランカは全体として貧しい国であるために、津波被害者に対する援助とそうでない人との格差が生まれてしまうこと。学校でも、津波でつぶれた学校は立派な学校に立て替えることができたが、マータラの小学校のように、津波の犠牲者は出たものの校舎に被害が及んでいない学校には全くの支援がないままで、講堂も廊下も教室に使っている状態のままである。また、怪我をした被害者や犠牲者を出した子どもたちの心のケアなどどこまで取り組まれているのかなど気がかりでもある。

今回、立命館の学生たちとマータラ市を訪れたときに時間を作って、「荷車の会」が支援しているマータラ女子仏教孤児院に立ち寄ることができた。津波で両親や家族を亡くした孤児3人が入所していたが、その子どもたちの屈託のない笑顔に励まされたスリランカ訪問であった。



2006年5月スリランカ



2006年9月東岸小学校



MATARA 被災地



アルガムベイ小の新しい教室で



アルガムベイ小の新しい校舎1



アルガムベイ小の新しい校舎2



植樹したマンゴー。根付いていた。



津波仮説住宅 05 5.11



被害のなかったコロomboの町並み



立命館アルガムベイ 2006年2月



アルガムベイ小の青空テント教室



植樹したマンゴー。牛に食べられないよう

感謝の言葉

「与えたい子どもたちに笑顔を、伝えたい被災地の現状を」この言葉を胸に私たちはプロジェクトを立ち上げた。

今回の活動場所であるマータラは訪問メンバー全員にとって初めての場所であった。また、スリランカ現地情勢の悪化のため実施の是非について多くの場面で議論されたという経緯もあった。そのため、少なからず不安を持った状態で日本を後にした。しかし、渡航までの私たちの活動をサポートしてくださった国際協力事業課小林さんをはじめ、私たち学生の活動を理解していただき実施のためにご尽力下さった立命館大学国際部の方々。前回に引き続き団長を務めてくださった藤山先生、現地の旅をとりしきってくださった坂田さん、そして現地活動中お世話になったラタナさんやカピラさん、ルフナ大学の学生など多くの方々のお陰で今回のプロジェクトを成功させることができた。また、現地情勢の悪化という条件の下での実施だったこともあり、保護者の方々にも多くのご心配をおかけしたのではないだろうか。しかし、私たちが企画に100%集中することができたのは、みなさんの支えがあったからこそだと感謝の気持ちでいっぱいである。

この報告書は今回お世話になった方々、そして多くの人たちに被災地の現状や私たちの活動を知ってもらいたいと考え、作成した。私たちはスリランカの子供たちに、何を残せただろうか。その答えが出るのはもっと先になるかもしれない。被災を乗り越え前向きに生きる力を身につけてほしいと願っていたが、私たちもまた彼らの笑顔から生きることの素晴らしさを教わった気がする。この経験を糧にさらに支援の輪を広げていきたいと考えている。



2006年9月支援校訪問報告書

2006年10月24日 発行

「学校再建プロジェクト」学生実行委員会

編集者 服部和希 ・ 中木寛敏

発行者 久保裕一 (学生実行委員会 委員長)

発行所 立命館大学 国際協力事業課

京都市北区等持院北町 56-1

Tel 075-466-3320 Fax 075-466-3321

この報告書やプロジェクトに関する質問は下記のアドレスまでお寄せください

「学校再建プロジェクト」学生実行委員会 remember_tsunami@yahoo.co.jp